

---

# 追憶ハイウェイ

斉藤せち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

追憶ハイウェイ

### 【Nコード】

N0611G

### 【作者名】

斉藤せち

### 【あらすじ】

婚約者から婚約を解消されて傷心のひかるは、11年ぶりに集まった高校の同窓会でニューハーフになった同級生、溝口誠一と再会する。美しく変身した彼女に驚くひかるだったが、母校で卒業時に埋めたタイムカプセルを掘り起こした折、セイラからある告白をされ、さらに驚く。それは高校時代にひかるが付き合っていた橋爪竜のことを自分もずっと好きだったというものだった。借金をして大阪に逃げているため、同窓会を欠席した竜に、タイムカプセルを届けてあげたいと言い出すセイラ。その熱意に打たれて、ひかるは自

分も一緒に大阪に行くことを決意する…。

災難というのは、自分が無防備でいる時に限って、思いがけないところから、全く唐突にやって来る。どこにもつけ入る隙のない、順風満帆で平穏な日常に、突如として冷や水を浴びせるように。

地震しかり、火災しかり、台風しかり、交通事故しかり。そりや後から振り返れば、家具を固定しておけばよかったとか、消火器を用意しておけばよかったとか、窓に板を打ちつけておけばよかったとか、周りをよく見て歩いておけばよかったとか、被害を回避すべき手だてはいろいろ思いつくのだらうけれど、いったい誰が忙しい日常の中で、いきなり震度7の揺れが襲ってくることや、外に置いておいた新聞の束に放火魔が火を点けることや、強風で飛ばされた材木が窓ガラスを突き破ることや、飲酒運転の車が歩道に突っ込んでくる危険性まで想定しながら、生活を送っているというのだらう。ああしておけばよかった、こうしておけばよかったはしょせん結果論であり、私達は災難という一種の奇襲攻撃を前にしては、ただただ無力でいることしかできない。いくら文明が進んで、人間が善後策を講じても講じても、いたちごっここのように盲点について襲ってくる、それが災難というものなのだ。

この春、私は突然、恋人から婚約を解消された。

結婚式まであと一月という、差し迫った時期での青天の霹靂だった。特別、二人の間に不穏の前兆らしきものがあつたわけではない。浮気が発覚したわけでもなければ、どちらかの親が強硬に結婚に反対したわけでもなかった。私達は普通のカップルと同じように、一緒に式場の下見をし、ドレスを選び、引き出物を選び、招待状を書いて、仲睦まじく結婚式の準備を進めていたのだ。なのに、破局は突然に訪れた。ふいに飛んできた火の粉が、一点の曇りもない幸福の設計図を跡形もなく焼き尽くすように。

「ごめん。すごく申し訳ないんだけど、結婚の話は白紙に戻してくれないか」

いきなり、式の打ち合わせの日どりを決めるつもりでかけた電話で、婚約者の洋介から別れを切り出された私は、しばらく呆然として言葉が出なかった。人間、あまりにショックなことがあると、悲しみを通り越して無感覚になるというけれど、本当にその時の私は脳の回線がショートしてしまったみたいに、彼の言葉だけが頭の中でぐるぐる回って、何も考えることができなかった。これは何かの冗談なんじゃないか、そうやって一生懸命、思考を前向きに転換しようとしたけれど、それが冗談でないことを裏打ちするかのように、電話の向こうでは重い沈黙が影を落としていた。

「どうしてよ。私、何か悪いことした？」

ようやく言葉が出てきたのは、彼の婚約破棄宣言を聞いてから、一分以上も経過してからのことだった。

「いや、ひかるは全然悪くないよ。全部、俺のわがままなんだ」

洋介はしどろもどろのひどく要領を得ない口ぶりで、突然の婚約破棄の理由を説明した。先日、行きつけのバーに足を運んだら、偶然、昔の彼女と運命的な再会を果たしたこと。その彼女は別れても忘れられない特別な存在で、風の便りで結婚したと聞いていたが、その日、夫と離婚したことを告白されて心が揺らいだこと。そして何となく離れがたくなった二人は、そのままホテルで一夜を過ごし、次の朝、彼女から「もう一度やり直さない？」と切り出されたこと……。しかし、それらの言い訳は、私にとっては到底納得のいかないものだった。

「何よ、それ！」

私は怒りで携帯電話を持つ手を震わせながら、唇を噛み締めた。せめて少しでもこちらに非があるのなら、まだ納得もできようものだけれど、自分の知らない時間、知らない場所で、自分の知らない人と起こった出来事に、人生が狂わされてしまうほど不愉快なことはない。これだから災難は嫌なのだ。いくらこっちが用意周到に事

を進めていても、ほんの一瞬で全てが覆って、今までの努力がみんな水の泡になってしまう。

「ほんとに、ごめん。俺もいろいろ悩んだんだ。式まであと一ヶ月だし、こんな時にキャンセルしたらお前にも周りの人にも、みんなに迷惑がかかるのは分かってる。でも、こんな中途半端な気持ちのままで結婚した方が、結果的にはもつとお互いのためによくないような気がするんだ。だから、どうか分かってくれないか……？」

「分かるも何も……、たとえここで私が『嫌だ』と言ったところで、結果は変わらないでしょ？ 洋介が私に『結婚を白紙にしたい』って話した時点で、もうどうしたって元には戻れないのよ。それが分かってて、最後の決断を私に委ねるなんて残酷じゃない？」

「そうだな……、ごめん……」

「ごめんじゃないわよっ、ばかっ！」

気がつくとき、私は自分でも驚くほど大きな声で洋介を怒鳴りつけていた。その声に気圧されるように、電話の向こうの彼はしょんぼりと黙り込んだ。洋介はずるい。そうやって自分はどんな叱責でも甘んじて受けますみたいな態度を示して。何だかこれじゃ私の方が聞き分けのない女みたいじゃないか。

すると、さらに洋介が私の気持ちを逆なでするように、こんなことを口走った。

「ほんと、今回のことは全面的にこっちが悪いし、できるだけ責任は取るよ。キャンセル料とか発生したら、全部俺が払うからさ……」

私は「いらない」と返事をする代わりに、反射的に携帯電話を床に叩きつけていた。責任取るって何よ……と、思わず答えの返ってこない電話機に向かって、いまいましげに呟く。洋介は自分がぶち壊したものの大きさを、そもそも理解していないのだ。もし分かっていたら、そんなに簡単に「責任」なんて言葉を口にできるはずがない。

私にとって「結婚」とは、人生そのものに等しいくらい重要な決断だった。女性が多様な生き方を選べる現代にあっても、競争社会

で男性と肩を並べてあくせく働くことを敬遠し、最初から「家庭」に自分の居場所を求める女性は実には少なくはない。私もそんな一人にほかならなかった。まずは好きな人と温かい家庭を作ることが最優先で、時間に余裕ができれば、家計を助けるためにパートにでも出ればいいか。仕事はあくまで、そういう家庭の添え物的位置づけにすぎなかった。だからこそ、私は資格取得やキャリアアップを目指す友人達を尻目に、将来の夫探しに奔走し、洋介との結婚が決まった後は会社まで辞めて準備に専念してきたのだ。その責任を、ただか数十万円程度のキャンセル料で済ませられると思っているのなら、私の人生もずいぶん軽く見られたものだ。

だけど、一度壊れてしまった以上、今さら二人の関係を元に戻すことなどできるはずもない。私はそれから一週間、結婚式をキャンセルするための、諸々の手続きや手回しに忙殺された。仕事でなかなか休みが取れない洋介の代わりに、式場に行つて話をつけ、彼の家に怒鳴り込んで行きそうな両親を懸命になだめて思い止まらせ、招待状を送ってしまった会社の上司や友人達には、あらためて結婚式取り消しの葉書を送り直した。不思議と、結婚に向かって準備をしている時は、忙しくても疲れなど微塵も感じなかったのに、それが振り出しに戻るための作業だと思つた途端、徒労感がどつと押し寄せてきた。何よりも、自分が捨てられるにもかかわらず、かいがいしく洋介の尻拭いまでやっている自分に、情けなくて腹が立つた。そうして傷ついた心に鞭打つようにして、何とか諸々の面倒くさい手続きを終え、状況も一段落してくると、あとには御役御免になった婚約指輪と、空っぽの私だけが残った。

二十九年間、誰かいい人と結婚して幸せな家庭を作るという将来設計しか描いてこなかった私には、当然、腕一本で生計を立てられるようなスキルも、企業が欲しがるような免許や資格もない。私はその時初めて、裸一貫の自分が何の潰しもきかない人間であることを痛感させられた。それまでは、残業残業で仕事に追われる総合職の友人達や、独身を貫いて留学だ転職だと貪欲に進む先輩達を

横目で見ては、何をあくせくと優越感さえ抱いていたのに、今、私の胸に去来するのは、なぜこれまでさんざん持て余していた暇な時間を、少しでも自分の役に立つ勉強や習い事にあてなかったのかという後悔ばかりだった。

私には何もない。人に誇るべきキャリアも、身を立てられるだけのスキルも。これからどうしたらいいんだろう……。

こんな風に自分が信じてきたもの、疑いもしなかった価値観が、足元から崩れ落ちていくような思いがしたのは、生まれて初めての経験だった。しかし今さら、新しい人生を切り開くといっても、すぐにやりたいことや夢が見つかるはずもない。途方に暮れ、時計の秒針をなぞるだけのような無気力な日々を送る私に、高校の同級生から十一年ぶりに同窓会の誘いがあったのは、婚約解消から一月ほど経った、四月のある日のことだった。

電話がかかってきたのは、ちょうど近くのスーパーで買い物を終え、家に帰ってきた夕方頃のことだった。

キッチンで冷蔵庫に買ってきたものをしまっていると、ふいに玄関の方で電話が鳴るのが聞こえた。急いで廊下に飛び出し受話器を取ると、私の耳元に響いたのは、聞き慣れない野太い声の女言葉だった。

「どーも、久しぶり！ 早川さんでしょ。元気だった？ アタシよ、アタシ、憶えてる？」

しかし「アタシ」という割には、その壊れたスピーカーから発せられたようなだみ声は、明らかに男の人のものである。いくら記憶をフル回転しても、ニューハーフの知り合いなど一人も思い当たらない私は、「すいませんが、どちら様でしょう？」と尋ねると、電話の主ははしゃいだハスキーボイスで答えた。

「溝口 誠一よ。高三の時、同じクラスだった。もともと、今じゃみんな私のこと『セイラ』って呼んでるけど」

溝口 誠一……、私は再び記憶を巡らせて、脳のメモリスティックを検索し始めた。すると、記憶の片隅でわずかにヒットする手応えがあった。

「あっ！」

「すぐには思い出せなかった？ まあ、分かるけど。アタシ、地味でおとなしかったから。あんまりみんなの記憶には残らないタイプよね」

溝口 誠一「セイラは、ニューハーフの人がよくそうするように、無理やりおばさんっぽい自嘲的な感じを作って、ギャハハと笑った。でも、私の記憶にある溝口 誠一のイメージは、本人が言ったような暗いものばかりではなかった。確かに彼は口数が少なく、クラスで目立つようなタイプではなかったけれど、別に嫌われたりいじめ

にあつたりはしていなかったし、その中性的なきれいな顔立ちと、休み時間にもあまり人とつるまず、一人で本を読んでいるような孤高な雰囲気は、ある種のカリスマ性さえ漂わせていたのだ。大勢で騒ぐうるさい男子達には敬遠されていたけれど、一部の女子からは熱狂的に支持される存在だった。しかしなぜ、特別親しくしていたわけでもない彼が、今になっていきなり電話なんかしてきたんだらうと、私は訝しく思った。

「それはいいけど、どうしたの？ 溝口君が私のところに電話かけてくるなんて」

「あつ、そうね！ 肝心なこと言い忘れてたわ。実はね、十年ぶりに同窓会をやることになったのよ。担任の大牟田先生って憶えてる？ あのこつつい、熊みたいな先生よ。あの先生が今年定年で学校を退職したんで、久々にみんなが集まって先生を労おうって、クラス委員やってた山本君と井上さんが計画してくれたの。それで、二人に連絡回すの手伝ってって頼まれて、こうして早川さんのところに電話したってわけ。ねえ、こんなことって滅多にないし、都合つきそうならぜひおいでよ」

「うん、行く、行く！」

私は即答した。どうせ家にいても暇を持て余すだけだし、同窓会は沈んだ気分を紛わしてくれる願ってもない誘いだった。大乗り気の私に、セイラも「そうこなくっちゃ！」と声を弾ませる。続けて彼女は「ところで」と話を脱線して、あるクラスメートの名前を口にした。

「早川さんって、橋爪 竜とはまだ連絡取ってる？」

その名前には、溝口 誠一と違ってすぐにピンときた。なぜなら彼と私は高校三年生の時に付き合っていたことがあったから。たった半年ちよつとという、短い交際期間ではあったが……。

「ううん、取ってない。私と竜、卒業したらすぐに別れちゃったから……」

すると、セイラは「やっぱり、そうよね」と、肩を落としたよう

に溜息をついた。話を聞いてみると、どうやらクラスの中で彼だけが誰とも音信不通で、実家の電話番号も変わってしまったというために、連絡の取りようがなくなっているということだった。

「万が一、竜の連絡先が分かったら、ここに電話してちょうだい」  
彼女はそう言うと、仕事先と携帯の番号を私に教えてくれた。しかし、私はメモを取りながらも、きつと竜の連絡先を積極的に調べることがはしないだろうし、間違っても竜の方から私に連絡が来るようなこともないだろうと思った。何せ、あんな別れ方をしてしまったのだから……。

セイラはそれから同窓会の場所と時間を告げると、「じゃあ、当日楽しみにしてるわ」と明るく言って電話を切った。受話器を置いた後、私は時の流れがもたらす人の変化にただただ驚いて、しばらく呆然と電話の前に立ち尽くしていた。

あの溝口 誠一が、まさかニューハーフになるなんて。

いや、そもそも同級生が将来ニューハーフになるなんて事態を、いったい誰が想像できるだろう。私の記憶の中にある溝口 誠一は、確かに容姿が中性的なところはあったにせよ、れっきとした男に違いなかった。百七十センチを超える長身に、陸上部で鍛えられた細く引き締まった肉体。短距離走が得意な彼は、高校の体育祭でも脚光を浴びる存在だった。無駄のない精悍な筋肉が、スタートダッシュと同時に伸びやかに躍動するさまは、洗練された駿馬のようで、玉のような汗をほとばしらせながら、先を走るランナーをじわじわと追い上げていく姿に、ギャラリーの女子達は黄色い歓声を上げて熱狂したものだ。

しかし、グラウンドの華やかな活躍に反して、普段の彼は風いだ海のように物静かな性格だった。他の男子のように制服を着崩したりせず、学ランの詰襟はきつちりと上まで留め、涼しい目でいつもどこか一歩引いてものを見ているような雰囲気は、ガキっぽい男子が多数を占める中であって、ずいぶん大人びて見えた。

彼は竜とは一年生の時クラスが一緒だったこともあり、結構仲良

くしていたようだけれど、私とはあまり言葉を交わしたことはなかった。だけど、その数少ない会話の中で、一つだけ印象に残っていることがある。それは竜との関係に亀裂が生じ始めていた一月に、偶然、放課後の教室に二人で居合わせた時のことだった。

話のきっかけを作ったのは私の方だった。その時、私は進路のことで担任から呼び出しを受けた竜を待っていて、持て余した時間を潰すぐらいの気軽な気持ちで、窓際の席で読書に耽る溝口 誠一に声をかけたのだ。

「何読んでるの？」

そう訊くと、彼はにっこり微笑んで、持っていた文庫本のカバーをめくり、表紙の題字を私に見せてくれた。それはタイトルだけは私も耳にしたことがある、どこか海外の作家の有名な小説だった。

「すごい、博学だねえ、溝口君は。私なんか、読書感想文を書く時ぐらいしか、本なんて読まないよ」

感心する私に、溝口 誠一は「そんなことないよ」と言って、照れくさそうにはにかんだ。そして、彼は本を閉じると、脇に立った私を見上げ、「誰待ってるの、彼氏？」と、邪気のない笑顔で尋ねてきた。

「うん、まあ……ね」

と、曖昧に頷いてはみたが、無理に作った笑顔はきつと引きつっていたのだろう。溝口 誠一は怪訝な顔をして、「何かあった？」と心配そうに尋ねてきた。その優しい問いかけに、私は思わずぼろりと本音を洩らしてしまった。

「……聞いてくれる？」

そして気がつくとは私は、自分の中に押し止めていた竜への不満を、洗いざらい彼にぶちまけていた。今から思えば、どうしてそんなことをしてしまったのか自分でも不思議に思うのだけれど、私は大して話したこともない異性のクラスメートに「竜は調子はいいいけれど、実行が伴わなくて、その上、自分の欠点を直視しようともせず、何から逃げてばかりいるところが許せない」と、そんなことをとり

とめもなく喋っていた。彼からしてみれば、いきなり親しくもない女子から彼氏の愚痴を聞かされて、さぞかし迷惑だったことだろう。しかし、彼は嫌な顔ひとつすることなく、時々、私の目を見て、うん、うんと深く頷きながら、要領を得ない私の話に我慢強く耳を傾けてくれた。特別、何かを言って慰めてくれたわけではない。ただ、過敏に反応するでもなく、適当に相槌を打つでもなく、全てを丸ごと柔和な表情で受け止めてくれる彼に思いを吐露していると、気心の知れた女友達というようで、不思議と不安や苛立ちが和らいでいくような気がした。

「でも、あいついい奴だよ」

私の愚痴をひととおり聞き尽くした後、溝口 誠一はそうぼつりと呟いた。彼は「『人間の持つている天性で、徳となり得ぬ欠点はなく、欠点となり得ぬ徳もない』って、誰か偉い人が言ってたよ」と鼻歌を歌うように囁くと、夕焼けに染まったグラウンドを眺めて眩しそうに目を細めた。

「だってよく言ってるよ。またひかるに怒られた、俺、あいつを喜ばせようとしてるのに、どうしていつも裏目に出ちゃうんだろって。ほら、あいつって、目の前の大切な人を喜ばせようと思って、後先考えずにものを言うところがあるからさ。だから、その調子がいいとか、実行が伴わないとかっていうのも、本当はサービス精神の裏返しなんだと思うよ。あいつは言ったことが実現できるかどうかよりも、その場で早川さんをどう楽しませるかかってことの方が大切なんだよ。それで、自分ができる以上のことを、何倍にも誇張して言っちゃうんじゃないかな、きつと」

その言葉に私はハッとさせられた。確かにそうなのだ。私は竜の一見軽いと誤解されがちだけど、ありふれた話に脚色を加えたり、夢のような思いつきを本当らしく話したりして、一生懸命に人を楽しませようとするところが好きだった。しかし、付き合っていくうちに、いつも本心をはぐらかすようなおちゃらかした態度が鼻につくようになって、そんなところも魅力に思えなくなっていたのだ。

そんな冷めかけた私の気持ちを、溝口 誠一は何気ない言葉で、原点に立ち返らせてくれた。私は正直、それまで溝口 誠一に対して、どこか冷めた人だというイメージを抱いていたので、このことは意外な一面として私の記憶に印象深く残った。

このことがあったおかげかどうかは分からないけれど、私と竜はそれから二ヶ月もった。しかし、結局最後は、卒業後に起こったある出来事がきっかけで、けんか別れをしてしまった。それから一度も会う機会がなかったので、彼が今どうしているのかは全く分からない。

私は久しぶりに、高校の時、ごく短い間だけ付き合った彼の顔を頭の中に思い浮かべた。当時、人気絶頂だったバンド「ルナシー」のボーカル・河村 隆一を真似て中途半端に髪を伸ばし、いきがって眉を細く整えたにきび面の学ラン姿。お調子者で授業中も騒いばかりいたけれど、不思議と誰からも憎まれない得なキャラクターだった。竜は一体どうしているのだろうか。私は彼に同窓会に来て欲しいような、欲しくないような複雑な気持ちがした。でも、もし誰かが連絡先を突き止めて彼が同窓会に来てくれたならば、今度こそはあのことを謝ろうと、私は壁のカレンダーに丸印をつけながら、密かに心に誓った。

### 三

同窓会はゴールデンウィークの、最初の休日の夕方に行われた。場所は母校の近くにある、文化祭の打ち上げなどでもお世話になった「やなぎ」という小料理屋だ。その二階に座敷が取ってあった。

少し遅れて会場に着くと、二列に長く連なった座卓には、もうほとんど人が揃っていて、早くも料理やビールを囲んで宴たけなわという感じだった。早速、学生時代に仲の良かった岡本 唯が、私を見つけて声をかけてきた。

「来た、来た。ひかる！ 久しぶり、元気だった？」

唯は手招きをして、空いた隣の席に私を座らせてくれた。周りには、グループで仲良くしていた、竹下 みゆきや稲葉 温子の姿もある。久しぶりに見る友人達は皆、歳を重ねて、高校の頃の無邪気な明るさだけではない、それぞれの属する環境に従った、大人としての風格を身につけていた。結婚して子供もいる唯は、体つきも話し方も貫禄がついて肝っ玉母さんといった風情になり、学生時代は天然ボケで通っていたみゆきは、外資系企業の営業職について、表情や話し方もびっくりするほどシャープで明晰になっている。そして、私達の中で一番おしゃれに心が高く、いつもファッション誌をめくっていた温子は、高級ブランドの店員になって、そのファッションセンスと化粧の厚さにより磨きをかけていた。

私達は久方ぶりに顔を合わせたこともあって、まるで高校時代に戻ったように、舞い上がって昔話に花を咲かせた。休み時間にみんなでふざけた話や、好きだった男の子の話、先生との思い出話などをしていると、砂埃が舞うグラウンドや、古ぼけた校舎や、机の落書きなど細部の情景までもが、すぐ目の前に浮かび上がってくるようだった。そして、そこに流れていた青くさく濃密な空気感さえ、頭の中に鮮明に蘇ってくるような気がした。

「はい、皆さん、前に注目してください！」

その時、座卓の中央から、クラス委員だった山本 一彦がふいに立ち上がり、皆に向かって呼びかけた。グレーのスーツをぱりっと着こなし、すっかり中堅サラリーマンの實禄を身につけた彼の隣には、今日の主役である元三年A組の担任、大牟田先生が並んで立っていた。

「えー、では、まずは本日の主役の大牟田先生から、ご挨拶をいただきますと思います」

皆の拍手を受けて照れくさそうに話を始めた先生は、隣の山本 一彦とは対照的に、ラグビー選手のようにいかつかった体格もひと回り小さくなり、昔よりこぢんまりとした印象を受けた。短く刈りこんだ髪型は変わらないけれど、そのところどころにはごま塩のよくな白髪が目立ち、目尻や口元には、昔は見られなかった皺がくつきりと刻まれている。十一年という歳月は、生徒達から「鉄壁」と呼ばれ恐れられていた先生の威圧感を、近所のおじいちゃん的な親しみやすさにすっかり変えてしまっていた。

私は先生が挨拶をしている間、目だけで辺りを見回して、溝口 誠一を探した。彼の姿は会場をそんに見渡さずとも、すぐに見つけることができた。中央から二つほど離れた席で、鮮やかなターコイズブルーのワンピースをゴージャスに着こなし、細い指で煙草を挟みながら悠然と話に聞き入る彼、いや彼女の姿は、座卓に並んだクラスメート達の中でも、ひととき異彩を放っていたからだ。

私は、一瞬でセイラに見とれてしまった。もともと整った目鼻立ち、化粧によっていつそう際立ち、骨ばって筋肉質だった体は、なめらかな曲線を持つ女性的な肉体へと劇的に変貌を遂げている。長くウェーブのかかった栗色の髪は、大きめの髪どめでルーズに束ねられ、後れ毛が垂れるうなじが妙に色っぽかった。

先生の挨拶が終わると、私はテーブルを移動してセイラに声をかけた。彼女は私を見るなり、「いやーん。早川さん、会いたかったー!」と嬉しそうに抱きついてきて、私を隣の席に座らせてくれた。そこには、大牟田先生や幹事の山本 一彦をはじめ、副委員長だっ

た井上 幸子や村山 茂之など、この会の主要メンバーが勢揃いしており、皆の話題は十年ぶりに再会してみたら、女に変身していたセイラのことを持ちきりだった。

「でも、早川さんもびっくりしただろ？ まさかこいつが十一年後にこんな姿で俺達の前に現れるとはね」

山本 一彦がセイラを指差し、茶化すように言った。ビールでだいぶ酔いが回っているらしく、「でもさ、その胸本物なの？ ちょっと触って確かめさせてよ」と、調子に乗って彼女の胸にまで手を伸ばそうとして、「ちよっと、やめてよ！ セクハラ大王！」と、怒り狂ったセイラに、往復ビンタを食らわされている。

話を聞いてみると、セイラはつい最近まで「溝口 誠一」として一般の企業でサラリーマンとして働いていたということだった。皆と同じようにビジネススーツに身を包み、經理の仕事をしながら、自分が普通の男と違うということを誰にも打ち明けることができず、悶々とした日々を過ごしていたらしい。そんな彼が変わったのは、同じ会社にいたお局のタツ子さんに、ストーカーをされたことがきっかけだったという。

「ほんと、しつこくて困っちゃったわよ。だって『僕は女の人に興味はありませんから』って、勇気を出して言っても、全然信じてくれないんだもの。『また、あなたもそんなこと言って私から逃げる気でしょ。私はね、さんざんその手で騙されてきたのよ』って、逆にムキになっちゃって、ロッカーに手作りのお弁当は入ってるわ、家の前で待ちぶせされるで大変だったんだから。でね、ある日思ったの。こうやって偽りの自分を演じ続けていても、自分も他人も傷つけるばかりでいいことないってね。それで次の日、化粧してスカート穿いて会社に行ったら、クビになっちゃったけど、おかげでストーカーもぴったり止んだわ」

それから彼は、知り合いの経営するニューハーフバーで「セイラ」として第二の人生を歩み始めた。今では結構指名もある売れっ子らしく、彼女が渡してくれた店の名刺には、名前の上に「NO.1」

と金色の縁取りで飾られた、けばけかしい文字が光っていた。

「それにしても、十一年ぶりだっていうのに、よくこれだけ集まったもんよねえ」

私は会場を見渡して、感心したように呟いた。皆、仕事や結婚で住所が変わったりもしているだろうに、四十二人いたクラスのメンバー中、三十人近くが同窓会に顔を揃えている。私はその中に橋爪竜がいないか、目を凝らして探してみた。だが、いくら隈なく見回してみても、こういう場では必ず会話の中心にいるはずの彼の姿は、どこにも見当たらなかった。

「竜は今日は来てないんだ？」

何気なく訊いてみると、急にその場にいた皆の顔が曇った。お互い伏目がちになったまま、誰も質問に答えようとはせず、気まずそうに目配せをしている。戸惑う私に、その沈黙の意味を教えてください。たのは、高校時代、竜と一番仲の良かった村山 茂之だった。

「……あいつ、今やばいらしいんだ」

「やばいって、何が？」

「俺も人づてに聞いた話なんだけど、何でもいろんなところで借金作って、首が回らなくなってるらしい。利子とか含めたら、何百万とか言ってたかな。それで、借金取りから身を隠すために、今は大阪の方に逃げてるって話だぜ」

村山 茂之によると、竜は高校を卒業後、結局、進学も就職もせずふらふらしたまま、毎日パチンコに明け暮れ、自堕落な生活を送っていたらしい。心配した友人達が、仕事を紹介したりして、一時はデザイン関係の会社に就職したこともあったけれど、どれも長くは続かなかった。アルバイトを転々として食いつなぐ日々と、ギャンブルで膨らんでゆく借金。そんな竜に愛想を尽かして、やがて友人達は一人、二人と離れていき、ついには誰も彼と連絡を取らなくなってしまった。村山 茂之もここ数年は全く音信不通だったのだけれど、たまたま出張で行った関西支社に竜のことを知っている人間がいて、思いがけず彼が大阪にいることを知ったのだという。

それを聞いて、私は深い溜息をついた。そして、それぞれに積み重ねられた十一年という歳月の不平等を思った。セイラに女になることを決心させた時間、友人達が自分の属する環境に順応していく時間、先生から威厳を取り去り、山本 一彦に貫禄を備えさせた時間、それほど人を変えてしまう重みのある時間が、竜にとってはまるで流水のように、何も積み上げることなく過ぎ去ってしまったのかと思うと、何かやるせない気持ちになった。

「竜って、面白くていい奴だったのに、そんな風になってたなんて、何か意外だな」

「十一年も経ったら人は変わるってことでしょ」

みんなは昔明るかった竜が、今はすっかり墮落してしまったことを知って、ショックを受けている様子だった。しかし、私は彼の明るさの裏に、今に繋がるような資性が潜んでいることに、高校の頃から薄々気がついていていた。みんなは竜のことを面白い奴だと言ったけれど、それは辛いことも苦しいこともぐっと内に収めて、他人の前で笑顔を見せる強さを持っていたからではなく、世の中の上澄みばかりをすくって生きているような享樂的なところが、周囲には陽気に見えていただけなのだ。彼は決して人は悪くないけれど、そういうところでどこか危うい脆さを持った人だった。

それきり、私達の間で竜の話題が上ることはなかった。それは教室という空間では確かに居場所を持っていた彼の奔放さが、常識と理性で形作られた大人の世界では、行き場をなくしてしまったあらわれのようにも思えて、何だか寂しいような気もした。だが、そんな中でただ一人セイラだけは、村山 茂之をつかまえて、こそこそと竜について何かを訊き出そうとしているようだった。

「やなぎ」での一次会が終わって、先生をタクシーで送り出すと、私達は二次会に行く前に、慣れ親しんだ学び舎を久しぶりに見に行ってみようということになった。私達のクラスは卒業の日、校庭の桜の樹の下にタイムカプセルを埋めていて、それを誰かが「十一年

ぶりに掘り起こしてみたい」と言い出したのを機に、皆、酔いの勢いも手伝って、「じゃあ今から行こう」と勢いづいたのだ。そして気がつく、自然と皆の足は駅とは反対の母校の方角へと向かっていった。

私達は山本 一彦を先頭に、母校へと続く土手道を二十人以上の集団で連れ立って歩いた。街灯のない土手道は暗く、おまけに昨日まで降り続いた雨で地面はぬかるんでいる。だが、酔っ払った男達は、そんな道の悪さなどおかまいなしに、上機嫌で音程の合っていない校歌を合唱しながら、母校へ向かって歩みを進めていった。少し遅れて、私とセイラもその後が続いていく。しかし、ヒールの高い靴を履いたセイラは、一歩踏み出すたびにぬかるみにずぶつ、ずぶつとヒールがはまって、「もう！ 誰よ、土手歩こうって言ったの！」と、しきりに不平を洩らしていた。

母校は私達が卒業した頃と、ほとんど変わってはいなかった。辺りが暗いためにはつきりと確認することはできないが、校門のそばに建っている手を繋いだ少年少女のブロンズ像も、コンクリートのひび割れが剥き出しになったぼろっちい校舎も、サッカーゴールがぼつりと佇むただっ広いグラウンドも、まるでそこだけ時間の流れが滞ってしまったように、私達の記憶にあるそのままの姿を留めていた。私達は裏門へ回り、低い柵を乗り越えて中に入ると、真っ直ぐにタイムカプセルが埋められた校庭を目指した。

十一年前にはまだ若木だった桜は、今は立派な大木に成長していた。校庭を縁取るように等間隔で植えられた樹木の隅っこに、ひときわ太い幹をつけてどっしりと根づくその根元には、「一九九八年 三年A組卒業記念」と記した小さな木札が、雨風に晒されてボロボロになりながらも、辛うじてその場所に残っている。山本 一彦は用務員室の隣にある物置小屋から大きめのシャベルを拝借してくと、皆が周りを取り囲むようにして見守る中、井上 幸子とともに、木札の立ててあったところの土を掘り起こし始めた。

しばらくすると、シャベルの先にガツンと何かが当たる手応えが

あった。さらに掘り進めていくと、土の中にタイムカプセルを覆っている青いビニールシートが見え始め、二人は周りの穴を少しずつ深くしていきながら、慎重にその箱を土の中から掘り出していった。そして、どろどろになった青いビニールシートを剥がし、さらにその中に幾重にも覆われた黒いビニール袋を破ると、ついにミカン箱くらいの半透明の四角いプラスチックボックスが、私達の前に姿を現した。

「すげえ、本当にあったよ」

「思ったよりも傷んでないわね」

十一年ぶりに対面を果たしたタイムカプセルは、あまりにも記憶が遠すぎて、懐かしいというよりは、ほとんど未知のもののような気がした。ケースの中にはそれぞれの「将来の自分に渡したいもの」が入った、銀色の球形のプラスチックケースが、パチンコ玉のようにクラスの数分詰め込まれている。だが、私は「ほら、これ早川の分だぞ」と言っただけのものを渡されても、正直自分が十一年前にこのカプセルに何を入れたのか、さっぱり憶えていなかった。

私は高校生の頃の自分に再会するような思いで、おそろおそろカプセルの蓋を開けた。中に入っていたのは、今ではガラクタとしか思えないような代物ばかりだった。当時、ファンだったアイドルの缶バッジやブロマイド、当時のヒット曲を編集したカセットテープ。そして、竜と付き合っていた頃につけていた日記帳。赤いキャンバス地の表紙がついたそのノートの中には、今読み返すと赤面してしまうような、当時の竜への思いが綴られていた。

「あら、何それ？ 昔の日記帳？」

すると、ノートを目ざとく見つけたセイラが、興味津々で私の手元を覗き込んできた。彼女は嫌がる私からノートを素早く奪い取ると、そこに書いてあった文面を声に出して読み上げ始めた。

「何なに……、『やったー、ついに竜とファーストキス！ 三回目のデートだったからそろそろかなって思ってたけど、帰りに公園のベンチで話したらやっぱり……。初めてだからすごいドキドキし

たけど、相手が好きな人だから嬉しかった。あらためて、世界で一番竜のことが大好きって思ったよ！ 明日学校で会うの、ちよっと照れちゃうな……」

「ちよっと、やめてよ！」

セイラは日記を取り返そうとする私の手をするりと交わして、吐き捨てるように言った。

「まったく、女っていうのは、『世界で一番』なんて言葉を本当に軽々しく使っただから……」

「人の日記勝手に読んどいて、その言い草はないでしょっ！」

私は日記を片手に好き勝手ばやくセイラを、いまいましげに見つめた。そして、そっちがそうなら、こっちだって仕返ししてやるわよっ、とばかりに、私は彼女が大事そうに抱えている銀のプラスチックケースに手を伸ばした。すると、セイラがそれをよけようと身を翻した拍子に、ケースの蓋が取れて、中からたくさんの写真がバラバラとこぼれ落ちてきた。

「あーあ、見られちゃった……」

地面に散らばった写真を見て、私は呆然と立ちすくんだ。小さな四角い紙片に切り取られているのは、体育祭や修学旅行や遠足など高校生活のありふれた風景ばかりだ。だが、それらの写真全てに竜が映っていることが、私の目を釘づけにした。まだあどけなさの残る顔で、友人と一緒にカメラの前ではにかむ竜、文化祭のステージでルナシーを真似てメイクをし、皆の前で格好をつけて歌う竜、修学旅行で行った広島で、鹿に睨まれながらお弁当を頬張る竜、高校一年生の頃から撮りためていたと思われるそれらの写真には、私の知らない竜の表情や時間が、たくさん刻まれていた。

「アタシ、竜のこと好きだったの。高校の三年間、ずっと」

しゃがみ込んで散らかった写真を拾い集めながら、セイラがぼつりと呟いた。私は何と言っているのか分からなかった。ただ、何も悪いことはしていないのに、何となく後ろめたいような、ばつの悪さを感じた。例えば、盗品をそれと知らずに購入してしまっ、ず

いぶん時間が経ってからその事実を知ってしまったような、そんな行き場のない罪悪感が私の胸を満たしていた。

ふと気まずさに目を反らすと、傍らには、皆のタイムカプセルが入っていたプラスチックのボックスが、まだ蓋を開けたままの状態で放置されていた。底には先に帰ってしまった人と、同窓会に来られなかった数人のタイムカプセルだけが、忘れられたように残されている。その中には、「橋爪」とシールが貼られた、竜のタイムカプセルもあった。セイラはそれを何気なく手に取ると、ハッと何かを思いついたように顔を上げ、私に向かって言った。

「アタシ、竜にこれを届けてあげようかしら」

私は驚いてセイラに尋ねた。

「でもどうするの？ 村山君も言ってたけど、竜は今、大阪にいてどこに住んでるかも分からないんですよ？」

「うん。でも、村山君の知り合いの関西支社の人だっけ？ から辿っていけば、居所は掴めると思うの。お金に困ってるんなら、何かアタシが力になってあげられることがあるかもしれないし……」

それを聞いて、私はもしかしたら、セイラは最初からこうすることを決めていたのかもしれない、と思った。あの同窓会の誘いで話をかけてくれた時から、彼女はやけに竜のことを気にかけている様子だった。きっと彼女は高校の頃から、いつか彼の前に女になって現れることができる日を、ずっと夢見てきたのだろう。なのに、せっかくそれが実現するという時になって、今度は肝心の竜がいなのだ。私はそれでも、何とかして竜を見つけ出そうという彼女の思いに、何となく打たれてしまった。そして、その熱意に影響されたのか、私の中でも後味の悪いまま終わってしまった竜との関係に、きちんとけじめをつけたいという思いが湧き起こってきた。

「ねえ、セイラ、それ私も連れてって。私もセイラと一緒に、竜にタイムカプセルを渡しに行く」

今度はセイラが驚いた顔で私を見た。

「何で？ もう竜とはとっくの昔に終わったんじゃないの？」

と、不思議そうに尋ねるセイラに、私は言った。

「うん。だけど、あいつに言いたかったこともあるし。どうせ今、私、結婚するはずだった人から婚約解消されて、仕事も辞めちゃって暇なんだ」

すると、セイラが私を見てニツと笑った。

「お互い男には運のない負け犬同士ってわけね」  
つられて私も彼女にニツと笑い返す。

「いいじゃない、旅は道連れ、世は情けよ」

そう言っていると、彼女は持っていた竜のタイムカプセルを、私に投げてよこした。初めて手にするその銀のプラスチックケースは、何が入っているのかは知らないが、その存在を主張するように、中からカタカタと乾いた音がした。

## 四

セイラとは一週間後の夕方に、新宿駅で待ち合わせをした。東南口を出て、大階段に座り込む若者達の間を縫うようにして下に降りると、タクシーや路駐車両が連なる列の中に、人目を引く鮮やかな黄色の軽自動車が停まっていた。セイラはそのドアにもたれるようにして、黒づくめの格好で煙草を吹かしていた。

「ごめん、お待たせ」

「遅いわよ、もう」

セイラは吸いかけた煙草をヒールの先で揉み消すと、頬を膨らませてすねた仕草をした。彼女はつばの広い黒い帽子にサングラス、タイトな黒のロングワンピースにパールのネックレスという、パーティーにでも出かけそうな格好で決めてきていて、私が「『ティファニーで朝食を』のオードリー・ヘップバーンみたい」と言うと、セイラは嬉しそうにフランスパンをかじる真似をした。

「NO.1っていうから、外車か何かで来るのかと思ってた」

助手席に乗り込み、思ったより狭い車内を見渡して、私が思わず感想を洩らすと、運転席に座ったセイラは「ばかねえ」と笑ってそれを一蹴した。

「そんなに儲かるわけないでしょ。オカマは何かと物入りなんだから」

そう言うと、彼女は帽子を後部座席に投げ込み、キーを差し込んでエンジンをかけた。その瞬間、ブルンという音とともに、狭いシートに小刻みの振動が伝わってくる。これで大阪までの長距離を走るのかと思うと、いささかげんなりした気分になった。

「じゃあ出発！ 行き当たりばつたりの人捜しへ！」

セイラの掛け声に、私は「縁起でもない」と突っ込みを入れる。ふと後ろを見ると、後部座席には幅がメートルもありそうな、大きなトランクが仰々しく積まれていて、「海外にでも行くみたい」

と私が茶化すと、「あら、海外より長丁場になるかもよ、何たって見つかるまで帰らないつもりだからね」と真顔で返されたので、私は少しぞつとしてしまった。

結局、私達はこの一週間で、セイラの当初の思惑通り、村山 茂之の知り合いを辿って、竜の現在の居所を突き止めることはできなかった。村山 茂之からその人の名前を訊いて、関西支社に電話をかけたところまではよかったのだが、その知り合い（名前を神崎さんという）が、私達のことを全く信用してくれず、まるで不審者のように電話口で門前払いを食らってしまったからだ。

まあ、いきなり知らない人間から電話がかかってきて、友人の連絡先を教えてくださいと言われれば、警戒心を抱くのももっともだけれど、それにしても、村山 茂之の名前も出して、こちらが高校の同級生であることを説明しているにも関わらず、「そんなこと言っただけあなたが借金取りじゃないって保証がどこにあるんです？」とまで疑ってくるのは、少し度が過ぎるように思われた。しかも、彼はそんな風に竜の事情に詳しくそうなことをほのめかしておきながら、「どのみち僕は遠い知り合い程度で、彼の連絡先とかそんなのは知りませんから。ついでに彼の借金とも全然関係ありませんから」と突き放して、ぴしゃりと電話を切ってしまったのだ。それから何度電話をかけても、彼には取り次いでもらえなかった。きっと受付の人間に私達のことを悪質な勧誘とでも言っただけで、上手く根回ししたんだろう。

しかし、セイラはそれでも、予定通り竜捜しの旅に出発すると言ってきたなかった。いくら「神崎さんは何も知らないって言ってるよ」と諭しても、彼女は古畑 任三郎のように額に指を当てて考え込む仕草をしながら、「あいつは絶対何か知ってるわ」と、自信满满に主張するのだ。だけど肝心の根拠を尋ねると、「どうしてって、女の勘よ」と言うばかりで、行って必ず竜に会えるという確信は彼女の方でも持っていないのだった。

「でもさ、せつかく訪ねて行っても、神崎さんに会うどころか、会

社にも入れてもらえなかったらどうするつもり？ 大阪中走り回って竜を捜すっていうの？」

私は車窓に流れるネオンを眺め、自分が大阪に向かっているのだということであらためて感じるにつれ、現実的な不安を口にした。しかし、セイラはそんな不安などどこ吹く風といったように、しれっとこう言い切った。

「大丈夫よ。電話では簡単に切ることができても、人間、直接訪ねて来られたりしたら、そう邪険には扱えないものよ。それに、何だか今回は絶対に竜に会えるような気がするの」

確信に満ちたセイラの口調に、私は呆れたように肩をすくめる。その後に続く言葉は、もう分かっていた。

「また、女の勘なんですよ？」

先手を打ってそう言つと、セイラは一本取られたというように軽く額を叩いて、いたずらっぽい笑みを私に向けた。

私達は途中に通りがかったラーメン屋で軽い夕食をとり、明治通りを南へ下って、渋谷に向かった。そして、ぎらぎらとしたネオンの波を抜けると、池尻入口から首都高速三号渋谷線に入った。

高速に入ると、それまで渋滞に巻き込まれて、亀のようなスピードを守っていた車は、一転して滑らかに進み始めた。ここから先は東京ＩＣから東名高速に入り、コンクリートの無機質な壁が続いてゆく単調な道のりだ。

「これから長いから、眠くならないようにしなくっちゃね」

セイラはドライブのＢＧＭにと、一枚のＭＤをカーステレオに挿し込んだ。すると、スピーカーから昔流行った、ミスターチルドレンの「Everything」が流れてきた。

「あ、懐かしい！」

「九七年のベストヒット集よ」

セイラは得意げに微笑んで言った。

「竜がアタシのために編集してくれたの。高校の時に彼がくれた、

最初で最後のプレゼントよ」

私はスピーカーに流れる曲に合わせて、うる覚えの歌詞を口ずさんでみた。純粹さを失った大人になっても、何を犠牲にしても守るべき人のいる大切さを歌ったこの曲は、竜の大のお気に入りで、ルナシーの曲とともに彼のカラオケの十八番だった。普段はポップミュージックなど聴かない彼が、例外的にミスチルのCDだけは購入して、「ミスチルは俺らの気持ちを代弁してるんだ」などと、よく訳知り顔で講釈していたのを思い出す。

「ねえ、ご飯食べたばかりで眠くなりそうだから、何か話をしてくれない？」

運転席で大きなあくびをしながら、セイラが言った。「どんな話がいいの？」と尋ねると、セイラは迷うことなく、一つのテーマをリクエストした。

「そうね、早川さんが付き合っていた頃の、竜の話をしてちょうだい」

「いいけど、セイラの方があいつのことはよく知ってるんじゃない？」

これは皮肉でも照れでもなかった。本当にそう思ったのだ。私が竜と付き合ったのはたった半年という短い期間で、それ以前はただのクラスメートの一人にすぎず、私は彼のことを深く知る前に、彼と向かい合うことすらしようとせずに、関係を絶ち切ってしまったのだから。そんな私から話を聞いたところで、セイラに得られるものなどあるのだろうか。しかし、私の懸念とは裏腹に、彼女は首を横に振った。

「そんなことないわよ。アタシが見てきたのは、彼の表の顔ばかりだもの。しょせんアタシは、クラスメートの一人としてしか接することができなかったから、彼の人には見せない弱い部分とか、そういう深いところまでは知ることができなかったの。ほら、前に早川さんがアタシに竜の相談をしてくれたことがあったでしょ？ その時、アタシ本当は早川さんにすごい嫉妬してたの。どうしてこの

子は女っていうだけで、アタシの知らない彼をいっぱい知ることができるんだろうってね。結局、アタシが彼を見てきた三年間は、早川さんが彼と付き合った半年間にはかなわなかったのよ」

私は褒められたのかけなされたのか分からないような、複雑な気持ちがした。あの時、一生懸命に私を励ましていてくれたように見えた溝口 誠一が、本心ではそんなことを思っていたとは、正直少しショックだった。しかし、私の方でも知らず知らずのうちにセイラを傷つけていたのだから、足して引いたらお互い様なのかもしれない。

私は竜と付き合っていた、十一年前に思いを巡らせた。久しぶりに、あの馬鹿っぽいけど快活な笑顔や、私より頭一つ秀でた恵まれた上背や、少しかすれた低い声が、頭の中にくっきりと蘇ってくる。たった半年という短い交際期間だったから、彼との思い出はそんなに多くはない。しかし、今から思うと、その一つ一つが私の中で他には代えがたい輝きを放っていた。

「退屈な話かもしれないけど……」

私はそう前置きをした上で、セイラに竜の話を始めた。

竜から告白された日を、私ははつきりと憶えている。それは、高三の夏休みも終わりに近づいた、八月下旬のある日のことだった。

まだ残暑の残る昼下がり、郵便受けに新聞を取りに行った母が、戻ってくるとなぜかニヤニヤしながら、縁側で涼んでいた私に、「あんたも隅に置けないわねえ」と言つて、一枚の葉書を差し出した。何のことが分からず首を傾げた私は、その葉書に目を落とした瞬間、母の言葉の意味を理解した。片隅にすいかの絵が描かれたその暑中見舞葉書の裏には、相田みつをのような力強い筆文字で、「早川ひかる お前が好きだ 付き合ってくれ」と書いてあったのだ。その差出人というのが、ほかでもない竜だった。

私は最初、それを見て、これは竜が考えたきついジョークに違いないと思った。竜はクラスでも率先してくだらない悪戯や、ばかば

かしい冗談を思いつくのが好きなお祭り人間で、英語の授業中に「センサー、英語で『うんこ』って何て言うんスカ」などと質問して教育実習の若い女の先生を困らせたり、修学旅行で夜中に友人達とバカ騒ぎをして宿泊客からクレームを受けたり、文化祭のライブで演出に花火を使ってボヤを起こしたりしては、先生達から大目玉を食らっていたのだ。しかし、彼はトラブルメーカーではあつたけれど、決して不良というわけではなかった。不良というのが学校という組織に反発し、背を向けた存在であるのなら、彼の場合はむしろ逆に、学校という組織に完全に取り込まれながら、その枠組の中でどれだけ面白おかしく過ごせるかということに、全精力を傾けるような人間だった。

そんな彼から来たラブレターだったから、私がそれを何の疑いもなく悪戯だと判断したのも、無理もないことだろう。だいたい、皆が受験受験と目の色を変えて勉強しているこの大切な時期に、「付き合おう」なんて言うてくると自体、真実味がなかったし、葉書のやけに仰々しい字体といい、どこから見てもそれが本気だとは考えられなかったのだ。

私はすぐさま、竜の家に電話をかけた。今なら携帯電話で直接本人と連絡が取れるのだろっけれど、当時はまだ高校生の間ではポケベルが主流だった時代だから、私は女からの電話にどこことなく警戒心を抱いている様子のお母さんに、「ちょっとクラスの連絡網で……」とか言い訳をしながら、何とか竜に取り次いでもらった。しばらくして電話口に出た彼は、今起きたばかりのような寝ぼけ声だった。

「よう、久しぶり。元気だった？」

「元気だった、じゃないわよ。何？ あの葉書」

「ああ、見たんだ？」

竜は拍子抜けするほど、素の口調で言った。「びつくりしただろー？」とおどけるわけでもなければ、「もしかしてお前本気にしたの？」と冷やかすわけでもなく、そのやけに普通な感じが、私を心

もとなない気分にした。

「見たけど、あれ、どういうことよ？」

「どういうことって、見たまんまだよ。お前と付き合いたい」

「はあ？」

私は竜の真剣な口ぶりど、事の唐突さとのギャップに面食らってしまった。思わず「ふざけないでよ」と、語気が荒くなる。確かに竜はクラスの仲良しグループの一人で、みんなで遊園地や海水浴に行ったことはあったけれど、彼が私のことを好きなそぶりなど、一度も見せたことがなかったのだ。「そんなこと急に言われても困るわよ」と、私は当惑した。

「困らないだろ。だってお前、彼氏いないじゃん」

「いなけりゃいいってもんじゃないでしょ！ 受験も近いんだし。だいたい、何でいきなり私と付き合いたいって思ったのよ？」

すると、それまでとは打って変わった物々しい口調で、竜が言った一言に私は絶句した。

「俺、この間死にかけたんだ」

「え？」

思わず受話器を持った手に力が入る。

「そんな、大丈夫なの？」

私が尋ねると、彼は「ああ、間一髪で無事だったんだけどな」と、芝居がかった溜息をついて、事の詳細を話し始めた。

「まあ、聞いてくれよ。俺、この間、村山達とキャンプに行ったんだよ。その時、皆で持ち寄りでバーベキューするはずだったんだけど、村山の奴、肝心の肉を買ってくるのを忘れてさ。仕方なく、俺とあいつでレンタサイクル借りて、ふもとのスーパーまで買い出しに行ったんだ。山道はずうっと、ゆるやかな螺旋状の下り坂が続いてて、自転車を飛ばすと吹き抜ける風が気持ちよくてさ。俺、つい調子に乗ってスピード出しすぎちゃったんだよな。そしたら、カーブに差しかった時に、いきなりブレーキのコントロールが効かなくなつてさ。俺、焦ったよ。だって、目の前を見たら、あるはずの

ガードレールが、そこだけぶつとり途切れてるんだもの。それで、俺はそのままカーブを曲がりきれずに、数メートル下の山肌に放り出されたんだ」

「えー、こわーい！」

私は思わず話に聞き入ってしまった、受話器を握り締め身をすくめた。そして勝手に包帯だらけの竜の姿を想像し、そういえば電話に出た時に寝ぼけ声だったのも、もしかしたらずっと寝ていなければいけないほどの重傷を負ったせいじゃないかと、不安でいっぱいになった。すでに頭の中からは、彼が送ってきた暑中見舞いのことなど、すっかり抜け落ちてしまっていた。

「それで、怪我はなかったの？」

「うん、幸いなことに着地したところが柔らかい草叢だったから、かすり傷程度で済んだんだけどな。でも、人間死ぬかもしれないって時には、走馬灯のようにいろんなことを思い出すって言うだろ？」

あれって本当なんだな。何か自分が生死の瀬戸際にいるにも関わらず、死ぬ前にあれもしたかったこれもしたかったって、いろいろ悠長なこと考えてさ。ああ、俺ってそういうえば、今まで女と付き合ったことなかったなー、彼女欲しかったなーって思ったら、いきなりお前の顔が目の前にパツと浮かんできたんだよ。それで、こっちに帰ってきたら、もう居ても立ってもいられなくなって、早速お前にあの葉書を送ったってわけだ」

「は？」

私は拍子抜けした声で訊き返した。いきなり肩の力が抜けた気分になったのは、今までの大仰な話が全て暑中見舞いの結論に至るための伏線だったと、その時やっと理解したからだだった。その途端、私の中にはずっと怪談だと思って聞いていた話が駄洒落で落とされた時のような、腹立たしい気持ちが入み上げてきた。

「ねえ。その話、ほんとなの？」

疑心暗鬼になり始める私に、竜は「本当だって！」と何度も念を押した。そして、彼は私の機嫌を直そうと、必死になって弁解を試

みた。

「言つとくけど、俺はラブレターはおろか、暑中見舞いだって書いたのは初めてだったんだぞ。後にも先にも、俺の書いた便りを受け取ったのはお前だけだ。それだけでも、俺の本気を察してくれよ」

しかし、私の中ではすでに、包帯だらけの竜の代わりに、机に向かい必死に私の度肝を抜く計画を立てる彼のイメージが膨らんでいた。もし私が休み中に電話をかけてこなかったら、彼は休み明けにはカモフラージュの絆創膏でも貼って、登校してくるつもりだったのだろうか。そう思うと、私は何だかおかしくなって笑ってしまった。もはや話の真偽はどうでもよく、気がつくとは私は、彼の勢いに押されるように、「いいよ、付き合っても」と、交際をOKしていた。すると、受話器の向こうで「よっしゃー！」と、嬉しそうな叫び声が上がった。

「よかった、正直俺、断られたらどうしようと思って冷や冷やしてたんだよね。そうか、そうか。やっぱりお前にも、俺のこの一途な想いが伝わったんだな。あの葉書に凝縮された、溢れんばかりの俺の『愛』がさ」

「何よ、OKしたとたん調子いいわね。どうせ駄目だったら、『冗談だよ』の一言で済ますつもりだったんでしょ。だから葉書なんて回りくどい手段使って。女々しいのよ」

さっきまでの憤ましさはどこへやら、すっかり有頂天で大口を叩く竜に、私はそう言っただけで毒づく。たった半年ちよつとの私達の関係は、こうして騒がしく始まったのだった。

私と竜はデートであまり遠出をしたことがなかった。というのも、竜はものぐさの上、忘れっぽい性格だったので、約束をしていても当日待ち合わせ場所に現れず、電話をしてみると「ごめん、今起きた」と寝ぼけ声で出てきて、結局近場に変更になることがしばしばだったからだ。その代わり、私達は二人で駅前のカラオケボックスやボーリング場や映画館によく出かけた。

竜のボーリングの球を投げるフォームは独特で、足をクロスさせ左手を高く掲げたその姿勢を見て、私は「仮面ライダーの変身ポーズみたい」と、よくからかったものだった。映画はラブストーリーよりも、アクションやコメディを観に行くことが多かった。はにかみ屋の私達は、濃密な愛の物語に浸るよりも、痛快なカースタントやくだらないギャグの応酬を見て、スカツとする方が性に合ったのだ。そして最後は、ファミレスかラーメン屋か回転寿司に行って締める。それがいつものお決まりのデートコースだった。

外で遊ぶお金のない時は、私達は竜の部屋で会い、一緒にゲームをしたり、漫画を読んだり、勉強をしたりもした。もちろん、異性への興味津々の年頃の男女が一つ屋根の下にいるのだから、それだけの健全な付き合いで済んでいたとは言わない。さすがに下に竜の両親がいると思うと、セックスはできなかったが、キスやペッティングはよくしていた。その頃は、愛情というよりも、そういうことが何か特別なことのように思えて、お互いの肌に触れることを無邪気に楽しんでいた。

竜の部屋には、小さな楽園があった。それは、ミニチュアの恐竜達が飾られた模型のジュラシックパークだ。フィギュア好きの竜は、百点を超えるロボットやキャラクターの人形を集めていたのだが、中でも恐竜は大のお気に入りで、彼はそれを飾るためにわざわざテールを買って、そこに本物そっくりの小さな島を作り上げていたのだった。

島は細部にまで手が込められていて、海岸線には砂浜を模したコルクパウダー、陸地の表面には芝を模した植毛シートが敷き詰められてあり、陸地を奥に進んだジャングルには、広葉樹の模型や、溶岩が吹き上げてきそうな火山まであった。そして、主役である恐竜達は、まるで生命を吹き込まれて実際に生息しているかのように、その風景に溶け込んでいた。湖で水浴びをするエラスモサウルス、首を伸ばして木の葉を食べるブラキオサウルス、火山の上を颯爽と飛翔するプテラノドン、獲物に向かって獰猛に牙をむくケラトサウルス…

…。ガレージキットと呼ばれるそれらのフィギュア達は、皮膚の皺や目の表情、ポーズに至るまで、今にも動き出しそうなリアルな迫力を持って、その存在を主張していた。

中でも、竜が特に大切にしていたのは、自分で作ったティラノサウルスのフィギュアだった。フィギュア好きが高じた竜は、そのうちに自分で粘土を使ってフィギュアもどきを作るまでになつていて、初めて作った記念すべき一作目が、そのティラノサウルスだったのだ。それは周りの恐竜達に比べて、精巧さでは見劣りするところはあつたけれど、その分、手作りの味があつて、皺の一つひとつ、表情の細部に至るまで、竜の情熱が滲み出ているようだった。また、彼は着色にも独自のこだわりを見せ、ティラノサウルスの体の表面に、目を見張るような鮮やかなイエローの塗料を施していた。そして、そのイエローが背中にいくにしたがつて、徐々にオレンジ色のグラデーションがかかつていく。それは、おおよそ私達の既成概念を覆すような、恐竜の色彩だった。

「何、これ？ こんな色の恐竜なんていないでしょ」

ある日、それを見てからかうと、彼が真顔でこう言い返してきたのを、私はよく憶えている。

「でもさ、テレビで誰かが言つてたけど、恐竜の皮膚の色や模様っていうのは、本当のところはまだ説明されてないらしいぜ。だから万に一つ、こういう原色の恐竜や水玉やストライプの恐竜がいた可能性だつて否定しきれないってことだよ」

竜はそのちつぱけな夢の詰まつた模型の島に、まるで愛玩動物にかけるほどの大きな愛情を注いでいた。普段、自分の部屋は散らかし放題のくせに、その島にだけはこまめにはたきをかけて、埃が積もらないように神経を尖らせていたことから、その愛着ぶりは一目瞭然だった。そして彼はしょっちゅう、恐竜達を掌にのせて眺めては、「ああ、いいなあ」と言つて、うっとりとし息をつくのだった。

しかし、私はどうしても、その手の込んだ玩具の島を好きになる

ことができなかった。恐竜達を愛しそうに手入れする竜も嫌いだった。なぜなら、その島は立派で、美しく、壮大だけれど、しょせんは模型というイマジネーションの世界からはみ出すことができないところが、竜という人間を象徴しているように思えたからだ。彼は人をわくわくさせ、未来を希望の色で染めるような夢を思い描くことはできるけれど、残念ながら、その壮大な夢を一つずつ段階を踏んで現実に移してゆく実行力には乏しい人だった。彼の夢はいつも彼の頭の中で膨らみ、完結し、最後はよくできた模型のように、それを眺めて楽しむだけの、空しい虚像に成り果ててしまうのだ。

例えば、仲間内でバンドを組むのが流行った頃には、彼もいち早くギターを購入し、「いつか俺もルナシーみたいにヒットを飛ばして、億万長者になってやる」と息巻いていたが、三ヶ月も経たないうちに、コードとの格闘に飽きて諦めてしまった。「ボキヤブラ天国」という番組が流行った時には、「芸人つてもてそうだよなー。俺も芸人になつて一発当てようかな」と言い出し、「もし俺がブレイクしてビッグになったら、ポルシェの助手席にひかるを乗せて、何でもうまいもん食いに連れていってやるよ」とうそぶいていた。そうかと思えば、沖縄がブームになった時には、「俺、大学卒業して何年か働いて金貯まったら、脱サラして沖縄に行こうかな。サトウキビかなんか育てながらさ、青い空と青い海に囲まれて、時間にあくせく追いたてられずに、のんびり過ごすのもいいと思わねえ？」なんて夢見がちに語ったりもしていた。でも、どれも本気じゃなかった。竜はいつも物事の華やかな部分ばかり見て、すぐその気になるくせに、ひとたび壁にぶつかると、それを乗り越えようと奮闘することはせずに、あっさり身を引いてしまうのだ。そして、結局最後はあの自室の小さな楽園に、自分の可能性を閉じ込めてしまう。私はそうやってくだらない自尊心を守るために、困難から目を反らしてばかりいる竜の弱さが嫌いだった。

「ねえ、竜、『不言実行』って言葉知ってる？ 本当に何かをやり遂げようとする人は、夢みたいな理想をあれこれ語る前に、まず着

実に一歩ずつ行動を起こすもんよ」

私は自分のことは棚に上げて、竜によくそう忠告していた。でも、いつも竜は「分かっているよ」と頷くばかりで、決してその重い腰を上げようとはしなかった。

そんな彼だから、当然、受験勉強だって真剣に取り組むはずもなかった。一緒に勉強をしていても、彼はたいがい先に根を上げ、「プテラノドンの大脱走」などとふざけながら、例の模型の恐竜を参考書の上に這わせたりして、人の勉強の邪魔をしてくるのだ。そして、私が真っ赤になって怒ると、それを見て彼はまた面白がって笑い転げるのだった。

「ちよつと、何がおかしいのよ。人が真面目に勉強してるっていうのに！」

「だって、お前の怒った顔、このプテラノドンそっくりだぜ」

「そんなことばかりしてて、志望校落ちても知らないわよ！」

「大丈夫、大丈夫。俺には運が味方してるから。それより、メシでも行こうぜ、勉強はまた明日、明日」

「何が明日よ、もう！」

しかし、そんなことを言いながらも、私は結局、最後には調子のいい言葉に丸め込まれて、彼を許してしまうのだった。「明日やる」と言って、翌日には同じセリフが繰り返されることはよく分かっている。それなのに、何だかんだ言いながら彼のペースに乗せられてしまうのは、私にも彼が語る夢の世界で泳いでいたいという気持ちがある、どこかにあったからなのかもしれない。でもあと数ヶ月もしないうちに、私はその現実とは無縁のユートピアに、いつまでも彼と共に留まっていられないと気づくことになるのだ。そんな破綻の入口が見え始めたのが、クリスマスの頃に二人で出かけた、東京デイズニールランドでの出来事だった。

その日はのっけから、何かいつもと違っていた。

まず、待ち合わせの場所に行くと、遅刻・ドタキャンの常習犯で

ある竜が、何と先に着いて、手持ち無沙汰な様子で私の来るのを待っていたのだ。いつも約束をしていても、守ったためしなどない彼のことを思えば、これは驚異的なことだった。竜は私を見ると、日頃の自分の振る舞いは棚に上げて、時計を見ながら「五分の遅刻だぞ」と唇を尖らせた。いつもの着古したダウンジャケットでなく、いっちょうちの黒いコートで決めているところも、この日の竜は一味違って、普段よりちよつとだけ男前に見えた。

私は初めて行くデイズニーランドが彼氏と一緒にであるということに、胸が高鳴っていた。クリスマスにデイズニーランド、なんていかにもベタだけれど、当時の私にとっては彼氏ができたら一度はやってみたと思っていた、憧れのデートプランだったのだ。それに思えばいつも地元のカラオケやファミレスなど、近場でしか遊んでいなかった私達にとって、これが初めて行く、デートスポットらしい場所でもあった。だから私も竜に負けず劣らず、白いコートにピンクのミニスカートという勝負服で決めてデートに臨んでいた。

かくして、クリスマスのデイズニーランドは、私達の期待を裏切らなかった。ゲートをくぐると、目の前には巨大なクリスマスツリーがきらきら輝き、路上では軽快な音楽に合わせて、私達のよく見知ったキャラクター達が愛嬌を振りまいている。その奥には無垢の象徴のような白いシンデレラ城、他方に聳える岩山にはジェットコースターが駆け抜け、雪のちらつく寒い日にもかかわらず、園内はたくさんのカップルや家族連れでごった返していた。

「すげえ、何かテンション上がるな」

竜はそのアニメの世界から抜け出てきたような、ファンタジックな空間を見て、私以上に興奮し声を弾ませた。彼は私の手を引き先に立って歩きながら、はしゃいだ様子でいろんなものを物珍しげに眺めて回った。一方、私はせっかく憧れのデートスポットにやって来たにもかかわらず、どこかはしゃぎきれないような、座りの悪い気持ちを感じていた。そして、それは時間が経つにつれてだんだん強くなっていった。私達はいろんなアトラクションに乗り、耳を

着けてミッキーマウスと記念写真を撮ったりして、他のカップルのようにデートを満喫していたけれど、楽しさの反面、私はなぜかそのテンションに乗りきれないような、このおとぎの世界に自分が溶け込むことに抵抗を感じるような、疎外感に近い違和感を抱いていたのだ。

この気持ちは何なんだろう。しかし、私にはその原因が何であるかはよく分からなかった。いつもさびれたボーリング場やカラオケにばかり行っているから、こんな人の多い場所に来て気後れしてるんだろうか、ぐらいに思っていた。だけど、そうではないと自覚したのは、あるアトラクションに乗った時、隣で竜がふとこんなことを洩らしたのがきっかけだった。

「なあ、デイズニールランドってさ、何でこんなに楽しいのかって思ったら、中から周りのビルとかが一切見えないんだよな。だから、ここにいる間は他のこと全部忘れて、この世界にどっぷり浸かることができるんだよ。一年に何度も訪れるほどハマる人が多いっていうのも、何か分かる気がするよな」

その時、私は自分が感じていた違和感の正体が、はつきり分かったような気がした。そうだ、ここは竜の部屋にある、模型のジュラシックパークにどこか似ているのだ。そこにいる時間だけ、見る人を完璧に別世界に導いてくれる、あの夢の島に。そのことに気付いた途端、私は今まで自分を取り囲んでいた、夢の世界を彩る小道具の数々が、無性にうらめしい物のように思えてきた。笑顔で手を振る三頭身のキャラクター達、お祭り気分を盛り上げる楽しいBGM、細部まで細工の行き届いた建造物、心躍る様々なアトラクション……、そんな物に囲まれて浮かれる竜は、あの模型の恐竜達を愛しそうに眺める時と、全く同じ表情をしていたから……。

そして、その日最高の出来事と、最悪の出来事は、閉園も近づいたフィナーレの頃に、ほぼ同時にやって来た。

最高の出来事とは、竜からもらったクリスマスプレゼントのことだった。エレクトロニカルパレードも見終わって、いよいよデートも

終盤に差しかった頃、私達はファイナーレの花火が少しでも良く見えるようにと、早々にシンデレラ城が真正面に見えるベストなポジションに陣取っていた。すると出しぬけに、竜が斜めに提げた鞆の中から、赤い包装紙に包まれた小さな箱を取り出した。

「ひかる、これクリスマスプレゼント」

「うそ！ いいの？」

私は驚きのあまり、思わず上ずった声で尋ねてしまった。まさか竜がプレゼントまで用意してくてるなんて、思ってもみなかったからだ。予想外の出来事に、期待に胸を膨らませながら開けてみると、ビロード地の立派なケースの中には、赤い石のついた小さなピアスが二つ光っていた。

「嬉しい！ この間ちょうどピアスの穴を空けたところだったんだよね。ねえ、この石ってもしかして……」

「カーネーションとか何とかっていったかな。お前、誕生日一月だろ？ その誕生石だって、店の人が言ってたぜ」

ガーネット、ガーネットだよと私は答えた。夢が叶う石って言われてるらしいよ、と教えてあげると、彼はふうんと頷いて、じゃあ俺も買おうかな、と独り言のように呟いた。私はその時、嬉しさで頭がいっぱいで、竜のその言葉の意味を深く考えることはしなかった。だって、いつも人の変化になど無関心で、髪型が変わってもろくに気づいてくれない彼が、私がピアスの穴を空けたのを憶えていてくれ、しかも誕生月の石をプレゼントするなんて、粹な心遣いを見せてくれたのだ。私はそれまでのどこか浮かない気分など吹き飛んで、竜の変化を喜び、今日は最高のデートだとすっかり有頂天になった。

しかし、私のその舞い上がった気分は、ファイナーレが始まってすぐ、ジェットコースターが急降下するように、一気に底辺へと突き落とされてしまった。なぜなら、光と音楽で盛り上がるファイナーレの真っ最中、頭上で打ち上がる花火を眺めながら、隣にいた竜がふとこんなことを口走ったからだ。

「なあ、俺、海外の美大を受けようと思うんだ」

「え？」

あまりの唐突さに、私は素っ頓狂な声を洩らしてしまった。音楽ならまだしも、作品といえば恐竜のフィギュアぐらいしか作ったことのない彼が美大なんて。しかも、これといった準備もしてないくせにいきなり海外とは。私は冗談とも本気とも判断がつかかねて、「そんな、美大に入るにはデッサンとかいろいろ実技の試験があるんだよ。日本の美大だって今から準備しても難しいのに、海外なんて無理だよ」

と忠告すると、竜は熱の込もった口調で私を諭すように言った。

「俺、アメリカに留学したいんだよな。ポップアートの本場だしさ。芸大とか美大とかもいっぱいあるみたいだし。それでイサム・ノグチみたいな、かつこいい彫刻いっぱい作りたいんだよ」

光のシヨーは、その時まさにクライマックスを迎えているところだった。頭上ではキャンバスに絵を描くように、夜空に幾筋もの光線が飛び交い、色とりどりの花火は、ほとぼしる絵の具の飛沫のように、華やかに弾けては暗闇の中に溶けていつている。しかし、私にはもはや、そんな夜空の芸術など堪能する余裕はなかった。心の中は急にのしかかってきた疲労感と、裏切られたような虚しい気持ちでいっぱいだった。せつかくずばらな竜の尻を叩いて、現実的に手の届く志望校を決めさせ、計画を立てて一緒に勉強してきたというのに、彼は私がそうやって一生懸命に現実に繋ぎ止めようと努力しても、ちよつと目を離れた隙に、自由奔放に大気圏外に飛び出してしまふのだ。それにしても、私に何の相談もなく、勝手に海外だなんていくら何でもひどすぎる。

「どうして何も言ってくれなかったのよ」

泣きそうになるのをこらえながら、批難を含んだ眼差しを向けると、竜は「ごめんな」と言っただけで私の頭を撫でた。しかしその口調は、待ち合わせ時間に遅れて、媚びた声で謝る時と同じ程度の重さしかなかった。

そして、ファイナーレが終わった。多くのカップルがまだショーの興奮が冷めやらぬ様子でそろそろと出口に向かう中、私達は重い足取りでイルミネーションが煌く道のりを、言葉少なに歩いていった。「なあ、また来年も来ような。デイズニールランド」

竜は私の機嫌を窺うように、明るい口調で話しかけた。しかし、私はさっき自分が言ったことも忘れて、お気楽にその場しのぎの口約束をする竜にますます不満を募らせた。

「アメリカ行くんでしょ。だったらそんなに簡単には来れないじゃない」

すると、竜は私の膨れっ面を笑い飛ばし、コツンと額を小突いてこう言ったのだった。

「ばーか、次は本場フロリダのデイズニールワールドだよ」

その時、私はプレゼントにもらったガーネットのピアスの箱を握り締めながら、「夢なんてくそくらえだ」と心の中で悪態をついた。

## 五

「ねえ、ちよつとお腹空かない？」

セイラが道端のサービスステーションの看板を見て、思いついたようにそう切り出したのは、ちょうどデイズニールンドの話が終わって、竜編集の九七年ベストヒット集が、三巡目のミスチルに差しかった頃だった。時計を見ると、すでに時刻は深夜の一時を過ぎている。食事といえば八時頃にラーメンを食べたつきりなので、言われてみれば、確かに少し空腹感があつた。

「今つてどのあたりなの？」と訊くと、セイラは頭上を通り過ぎる案内標識に目を遣りながら、「そうね、もうそろそろ名神に入るころだと思っけど」と答えた。

「じゃあ名古屋のあたりか。時間には余裕ありそうだし、ちよつと休んでいく？」

セイラは「そうね」と頷き、脇道に反れると奥へと進んで、煌々と明かりの灯るサービスステーションへと入っていった。車を降りて中に入ると、すでに軽食を売っている調理場は電気が消えてひっそりとしており、私達は仕方なく、入口付近にずらりと並んだ自動販売機で、カップラーメンを買って食べることにした。

「今日はラーメンばかりね」とセイラは苦笑いをしたが、それでも彼女は湯気が立ち上る即席麺をおいしそうに頬張っていた。

セイラは車の中で私がした話を、ずいぶん驚きを持って受け止めたようだった。彼女はラーメンを食べる間も、ずっと竜の部屋の恐竜の島の話を持ち出し、「やっぱり私つて何も知らなかったのねえ」と、悔しそうに唇を噛んだ。しかし一方で、その話は彼女にとって大きな収穫でもあつたらしく、彼女は生き生きと目を輝かせながら、「やつとこれで納得がいったわ。ずっと不思議に思ってたのよ。何でもまた美術部でもない竜が、受験の三ヶ月前になって、いきなり志望校を変えたりしたんだらうつてね」と、興奮した様子でまくした

てていた。

「でも、三ヶ月前のどたん場で、いきなり美大でしかも海外なんて無謀すぎると思わない？」

私が言つと、セイラはいたずらっぽい目で私を見返しながら、「あら、そこが面白いんじゃない。竜らしくて」と言つてニツと笑つた。

「でもさ、結局、竜が願書を出したのつて、東京の美大だったでしょ？ それはどうして？」

私はセイラの記憶力に驚いて啞然とした。確かにそうなのだ。東京デイズニールランドで、あれだけ海外の大学を受験すると息巻いていた割に、何も調べていなかった竜は、いざ出願するという段になつて、海外の美大の出願にはポートフォリオというプロフィール代わりの作品集の提出が必要だと知つて、仕方なく東京の美大に進路を変更したのだった。しかし、それだつて付け焼刃の知識で受かるほど甘いはずはなく、結果は惨敗。そのいきさつを説明すると、セイラは「全く、竜らしいというか」と言つて肩をすくめた。そして泣き笑いのような表情を浮かべながら、「そんなに海外の美大に行きたかつたんなら、作品を作つて次の年に挑戦すればよかつたのに。本当に根気がないんだから、ねえ？」と、同意を求めるように私の方に首を傾げた。

私は彼女の問いかけに「そうね」と生返事をし、目を反らした。彼女の目を直視できなかったのは、竜が次の年に海外の美大を受験しなかつた本当の理由に心当たりがあつたからだ。しかも、私自身が、彼に受験を諦めさせた原因を作つた張本人かもしれないということ、口が裂けても言えなかつた。あの私達の破局の日。桜の散り際とともに、私達の関係も終わりを迎えてしまった、卒業後間もないあの日の出来事が、竜の人生を狂わせるきっかけになつてしまつたのだとしたら……。私は同窓会で彼のその後の顛末を聞いて以来、そんな罪悪感に時折苛まれてしまふのだった。

すると、セイラが私の頭の中を見透かしたように、唐突にこんな

ことを訊いてきた。

「ねえ、ずっと気になってたんだけど、早川さんって、一体どうして竜と別れたわけ？」

私はぎくつとして身をすくめた。一瞬、彼女は全ての事情を知っていて、私を困らせるためにわざとこんなことを訊いているんじゃないかと疑ってしまった。だけどすぐに、竜が美大を志した理由さえ知らなかった彼女が、まさかそのことを知っているはずはないと、冷静に思い直した。

「別に、特にこれって理由はないよ。卒業して何となくお互いに連絡を取らなくなつて、自然消滅つて感じ」

動揺を悟られないよう、平静を装って答えると、セイラはなおも食い下がって「本当？」と、私の顔を覗き込んだ。たまりかねた私が、「どうしてそんなこと訊くのよ？」と尋ねると、彼女は長距離走行の大型バスが、列をなして入ってくる駐車場にちらりと目を遣つてから、ひそひそ話をするように身を乗り出してきた。

「だって、いきなり一緒に大阪に行くなんて言い出すんだもの。十一年も前に別れた男に会うためによ。そりゃ、別れ際によっぽど後味の悪いことでもあったのかって勘ぐるのも当然じゃない」

「……まさか。私が行くつて言つたのは、ただ暇だったから。旅行がてら向こうの友達にも会いたいしさ。そんな深い意味なんてないよ」

苦し紛れに言い訳をすると、ちょうどその時、長距離バスから降りてきた団体が、そろそろとサービスステーションの中になだれ込んできた。私は助かった、とばかりに席を立つと、「そろそろ出ようか」と言つてセイラを促した。

「女の勘も今度ばかりは外れたわね」

と、私は空いたカップを手に、出口に向かうセイラに軽口を叩いたが、内心ではばくばくと心臓が高鳴っているのを悟られやしないかと、心配でたまらなかった。

サービスエリアを出ると、私達は再び深夜のハイウェイを大阪に向かつて車を走らせた。周りの風景は先に進むにつれ、次第に田舎の色合いを帯びていき、今、車窓から見えるのは、喬木の生い茂るうつそうとした山肌ばかりだ。私達を威圧するように幾重にも連なるその山並は、いつ絶えるともなくどこまでも続いているように見えた。

その単調な道のりに、セイラの疲労にも拍車がかかったのだろうか、彼女は時折、こめかみを押さえて目をしばたかせながら、生あくびを繰り返すようになった。道路にはドライバーの眠気を防ぐために、一定距離ごとに金属の継目のような起伏が設けられているが、それは子守唄を聴かせる時に母親が子供の背中を叩いてリズムを取る時のような、優しい刺激しか与えてくれない。高速に入ってからかれこれ五時間以上もハンドルを握り続けているセイラの体力は、もう限界に近づいていた。

私はさりげなく「運転、変わろうか？」と、声をかけてみた。しかし、セイラは不安そうな一瞥を私にくれて言った。

「早川さんって、免許持ってたんだ？」

「失礼な。それでも優良ドライバーよ」

「……それってもしかして、ペーパーだから点数引かれてないだけじゃないの？」

「やあねえ、乗ってるわよ、ちゃんと。……年に二回か三回ぐらいだけ」

ボソリと付け加えると、セイラは諦めたように溜息をつき、苦笑いをしながらハンドルを握り直した。

「……やっぱりアタシが運転するわ。早川さんに運転してもらって目が覚めたらあの世だったなんてご免だもの」

セイラがそう言うのも無理はなかった。走行する車の多くが、ダンプトラックや長距離バスという深夜のハイウェイは、スピードの無法地帯といっても過言ではなかった。セイラはそれらの大型車が猛スピードで脇を駆け抜けていくたび、風圧で車がよろめきそうに

なるのを、巧みなハンドル操作で何とか凌いでいたのだ。重量級の  
いかつい車体に囲まれると、私達のぼんこつ軽自動車は、まるで象  
の群れに紛れこんだ鼠のようだった。

「煙草吸っていいかしら？」

セイラは眠気を醒まそうと、ダッシュボードのシガレットケース  
から取り出したヴァージニアスリムに火を点け、運転席の窓を少し  
開けた。すると、隙間からびゅうびゅうと唸るような冷たい疾風が  
吹き込んできて、一瞬、目の醒めるような感じがした。セイラが外  
に向けて煙を吐き出すと、紫煙は白い筋を描いて立ち上ることもな  
く、その頬を叩くような強い風にかき消されて、慌しく闇の中に溶  
けていった。

「寝ていいわよ」とセイラは言ったが、疲労困憊の彼女にハンド  
ルを握らせておいて、自分だけ隣でぐう寝入るなんてことは、  
さすがの私でも気が引けてできない。その代わり、私は風に髪をな  
びかせながら、煙草をくゆらすセイラの涼しげな横顔をじっと見つ  
めていた。暖色の灯りに浮かび上がった肌は陶器のように白く、繊  
細で彫りの深い目鼻立ちを持った面輪は、ガラスケースにしまつて  
遠巻きに眺めたいような、近寄りがたい美しさがあった。中でも私  
は、どこか哲学的な思惑をたたえた、澄明な鳶色の瞳が好きだ。他  
人よりも秀でた資質を有しているにもかかわらず、何一つとして自  
分に満足していないような、憂いを秘めた瞳。私はこんな瞳を持っ  
た彼女が、どうして竜みたい男に惹かれたのが、未だによく分  
からなかった。

竜は物事を頭ではなく全て感覚で捉えるようなタイプで、セイラ  
とは全く正反対の性質を持った人間だ。例えば、一枚の絵を観るに  
したって、セイラならその画家の背景や美術史における役割まで関  
心が及ぶのだろうけれど、竜はきつと色彩や構図など、視角から与  
えられる印象以外には興味を払わないだろう。誰かを好きになつて  
も、セイラならその人の魅力を的確な言葉で表現することができ  
るだろうけれど、竜は自分が心を惹かれているものの正体をきちんと

分析することができずに、「何かいい感じ」という曖昧な言葉で片付けてしまっただろう。そんな彼のどこにセイラを惹きつける魅力があったのか、私は不思議でたまらなかった。

「ねえ、どうしてセイラは竜のことを好きになったの？」

セイラは不意を突かれたのか、戸惑ったような表情で私の顔をじっと見返した。

「どうしてそんなこと訊くの？」

「どうしてって……、そんなに深い意味はないけど、ただセイラと竜じゃ不釣り合いというか、全然タイプの違う人間のような気がするからよ。セイラにはもっと、知性も思慮分別もある大人の男の方が似合うと思うの」

すると、セイラは自嘲的な微笑を浮かべ、「そうね。アタシもどうして竜のことを好きになったのか、自分でもよく分からないの」と肩をすくめた。

「でも一つ言えることは、竜が早川さんが言うような、隙のない完璧な男だったら、たぶんアタシは竜のことを好きになったりはしてなかったってことよ。アタシってどうも、将来出世しなさそうな、頼りないタイプの男に弱いみたい。損な役回りよね」

セイラは指に挟んでいた煙草を、くしゅつと灰皿の上で揉み消すと、おどけるように言った。そして、彼女は過去の記憶を懐かしむように目を細めながら、私と知り合う前の竜との思い出話を語り始めた――。

## 六

アタシと竜が出会ったのは、忘れもしない、高校の入学式の日のことだったわ。クラス発表が終わって、教室で皆が初めて顔を合わせた時に、ちょうど隣の席に座っていたのが竜だったの。竜は新しく始まる高校生活に興味津々といった感じで、物珍しそうにきよろきよろと教室の中を見回してたわ。そして、その好奇心を早く誰かと分かち合いたいというように、早速私に「なあ、お前どこの中学だった？」って話しかけてきたの。

アタシが「東中」って答えると、彼は人懐っこそうな笑顔を浮かべて言ったわ。

「俺、西中。東中って、川を隔てた向こうの町にあるとこだろ？ やっぱ高校って、いろんなところから人が集まってきたるんだなあ。中学は小学校と同じ面子で、全然新鮮味なかったけど。俺、初めてなんだ、電車使って学校通うの。下に売店とかもあるしさあ、女子も西中と比べてかわいい娘多いし、何か高校って自由な感じでわくわくするよな？」

アタシはそっけなく「別に」と答えた。なぜなら正直、アタシは高校ってところに、何の期待も希望も抱いていなかったから。

ほら、アタシって昔は無口で、一人でよく本とか読んでたじゃない？ それが男子からはすかしてるとって見られちゃったみたいで、中学時代はずっとシカトされて同性の友達是一人もできなかったのよね。本当はあの頃の男子がよくする、マスターベーションとかセックスとかの話題に、未成熟なアタシはついていけなくて黙ってただけなんだけど、そのノリの悪さが、カッコつけてるって誤解されちゃって。喋らない割に女の子達から受けがよかったのも、余計に彼らの嫉妬心を煽ってしまったみたい。それで、向こうがそうなら、こっちも無理して仲良くならなくてもいいやって、何か開き直っちゃってね。実際、その頃は男子達とファーストフード店でするバカ

話よりも、本の中に書いてある自分の知らない世界だったり思想だったりの方が、よっぽどアタシの心を捉えていたから、一人でいる時間もそんなに苦にはならなかったんだけど。

だから、竜が新生活に胸を躍らせながら話しかけてきた時も、アタシは心の中で思ってた。「ああ、こいつは女の子とゲームとファーストフードとカラオケと小室哲哉とスラムダンクが好きな大多数の男子だから、さぞかし友達がいっぱいできて高校生活も楽しいんだろうな。でも、俺は違う。高校生になったからって、中学時代と大して変わりはない。どうせまた一人なんだ」って。

そしたら、そんなやさぐれた気持ち言葉にも現れてたんでしょ、うね、「別に」って言った後、竜はアタシのこと捨てられた子犬でも見るみたいに、同情するような目で見たの。アタシ、うつうつとして思ってたわ。お前らの軽い脳味噌で勝手に人のこと『かわいそう』って判断すんじゃないよ。俺は一人でいたって、お前らと違って寂しいとも何とも思わねんだよって。でも、その後で竜が言った言葉が、あまりに予想外の暴投だったから、アタシの怒りはぶつける先をなくして、しおしおと萎えちゃったんだけど。

あいつ、よりもよって機嫌を損ねてるアタシに、こんな提案をしてきたのよ。

「なあ、今からビンゴしようぜ」

「はあ？」

ちようど先生が簡単な挨拶を終えて、生徒達に順番に自己紹介を始めさせようとしている時だったわ。竜は呆氣にとられる私をよそに、ノートを開いて手早く縦横四本ずつ線を引っ張ると、そのページをちぎって私に渡してきたの。そしてこう言ったわ。

「これからやるのは自己紹介ビンゴだ。だって、自己紹介の時間って退屈だろ？ どうせ名前聞いてもすぐ忘れちゃうんだし。だってこの時間を、もっと有意義に過ごそうぜ」

すると、竜はアタシがまだやるとも何とも言ってないのに、勝手にルールを説明し始めたの。今から自己紹介していく時に、みんな

絶対趣味とか中学の頃入った部活とか、そういうことを言うから、それを事前に予想して柵目の中に埋めていくんだ。例えば、料理とかギターとか、水泳とかサッカーとか。それで、自己紹介した奴がそれを言えば柵目にマルをつけて、マルが五つ揃えばビンゴ。負けの方がジューズ奢りな、って。そして早速、自分はノートの柵目を埋め始めちゃうもんだから、もう仕方ないじゃない？ アタシも渋々、そのゲームに付き合う羽目になったのよ。

勝敗は意外にも簡単には決まらなかったわ。二人ともいくつかりーチはあるんだけど、最後の一つがなかなか揃わなくて、勝負の行方は結局、アタシの番になるまでもつれ込んだの。

「なあ、お前、自己紹介で何て言うつもりなんだよ？」

起立する前、竜はアタシの肩を小突いて、そう尋ねてきたわ。そしてこう続けたの。

「お前、絶対趣味は読書だろ。さつきだって、ホームルームが始まるまで、熱心に何か読んでたもんな？」

アタシは「さあね」って、含みを持たせた言い方で受け流したわ。その時、頭の中に芽生えたのは「絶対、素直に趣味は読書なんて言うてやらない」ってことだった。本当は、竜に言われるまで「読書が好きです」って言うつもりでいたの。でも、そんな風に踏み絵を差し出されたら、ひねくれ者のアタシとしては、是が非でもそんなものは踏むもんかって、反撥心を煽られちゃったわけよ。

だから、アタシは自己紹介の時、「趣味とか特技は、特にありません」って言うて、名前以外は何も紹介せずに締めくくったわ。先生は「それだけか？」って物足りなさそうにしてたけど、アタシは竜を出し抜いたと思っていい気分だった。そして、してやったりという顔で隣の席を見てやったの。

そしたら、竜が机の下でガッツポーズを作りながら、「ビンゴ！」って小さな声で囁いているじゃないの。彼はそれを証明するように、五つマルの揃ったノートの切れ端を、自慢気に見せびらかしてきたわ。そこには確かに、「特にナシ」って書かれて、マルのつけられ

た榊目があった。彼は勝ち誇った顔で言ったわ。

「お前は絶対、そう言うと思った」って。

アタシはその時初めて、ああ、そうか、さっきのは俺にこう言わせるためのフェイクだったんだなって気が付いたの。相手を出し抜いたつもりでいて、うまく乗せられてたのは自分の方だったんだってね。でも、悔しそうにするのも癪にさわるから、アタシ、何だこんな子供の遊びじゃないかって感じで、「はい、どうぞ。これでジューズでも買いな」って、財布から百円玉を出して彼の机の上に置いてやったの。そしたら、意外にも彼はその百円を突き返してきた、こう言ったわ。

「お前、学校面白くないって思ってるだろ。さっきからずーっと変わらない、その仏頂面見てたら分かる」

そして、私の方にいたずらっぽい目配せをすると、こう付け加えたの。

「でも、俺といったらお前の考え方も変わると思っぜ。俺が絶対、お前に学校面白いて思わせてやる」

そう言われて、アタシの胸には雷に打たれたような衝撃が走ったわ。何だ、こいつ面白えて思った。そして、この高校生活は何か今までとは違うような、特別な予感がしたの。

実際、彼と友達になって、アタシの学生生活は百八十度変わったものになったわ。

まず変わったのは、アタシの周りに人が集まるようになったってことね。もちろん皆は、社交的で話し上手な竜と喋りたくて集まってくるんであって、アタシ目当てではなかったんだけど。でも、不思議なもので、人の輪の中にいると、あまり喋らなくても面白くなくて、グループに溶け込むコツみたいなのを掴めるようになってくるのよね。竜が一生懸命、アタシを会話に入れようと、骨を折ってくれたのも功を奏したんだと思うわ。それで、アタシは何となくグループに自分の居場所を見つけることができるようになって、少

しだけど、竜以外に親しい友達もできたの。

それから、部活にも入ったわ。陸上部のユニフォームが格好いいから、一緒にやろうって竜に誘われてね。まあ、あいつの方はすぐに飽きて辞めちゃったけど。で、一緒に辞めるのも何だから続けてたら、意外にアタシ素質あったみたいで。いろんな大会や競技会に選抜されたりもしたわ。そんな風に、彼のおかげで、アタシの世界はぐっと広がったの。

でもその頃はまだ、竜のことを恋愛の対象として意識なんてしてなかった。それどころか、自分が性同一性障害ってことさえ、気づいてはいなかった。自分は周りのみんなより少し奥手なだけで、そのうちに好きな女の子もできるだろうし、彼女ができればキスやセックスもするんだろうなって、無邪気に思ってたの。だから、竜のこともすごく大切な友達としか認識していなかったし、彼といって妙に嬉しいような恥ずかしいような、切ない気持ちになるのも、恋愛という感情とは違うって、自分に言い聞かせようとしてたわね。

でもある日、竜が男友達と話しているのに偶然居合わせた時、アタシは自分の竜への気持ち、ただの友情とは違うということに、はつきり気づいたの。

その話の内容ってというのは、クラスでどの女子が一番気になるかを一人ずつ言い合っている、他愛もないものだったんだけどね。竜が挙げたのは、朝山さんっていう、クラスでも評判の美人の女の子だった。ピアノが上手くて、サラサラのロングヘアの、お嬢様っぽいかわいい子でね。その頃、クラスの男子の八割ぐらいは彼女に憧れてたんじゃないかしら。まあ、だから、竜がその子に興味を抱いたのも、それはアイドルなんかを好きになるのと同じような、無邪気な憧れだったと思うのよ。

だけど、彼の口からその子の名前が出た瞬間、アタシは胸の奥から、何か得体の知れないどろどろとした感情が沸き上がってくるのを感じたの。頬がかあつと熱くなって、胸は締めつけられるみたいに苦しくてね、アタシそれまではあまり人を憎んだりとかしたこと

なかったんだけど、その子のことははつきり憎いつて思ったわ。そう、嫉妬よ。女で、かわいくて、竜から好意を持たれてるなんて、彼女自身には何の責任もないことなのに、アタシはそうやって最初から何でも持つている彼女が許せなかったのよね。それからしばらくは、本当に辛かったわ。教室で朝山さんを見かけるたび、非の打ち所のないようないい子なのに、言葉遣いが男に媚びてるとか、よく見たら目が離れててそんなに美人じゃないとか、些細な欠点を頭の中で列挙して、虚しい優越感に救いを求めたりしてね。それで、また自分の醜い一面を発見して、自己嫌悪に陥るっていう悪循環なの。

結局、一ヶ月も経たないうちに、その子は別の男の子と付き合い始めて、竜は失恋してしまつたわけなんだけど、アタシの中では、それでめでたしめでたしというわけにはいかなかった。

率直に言うと、アタシは自分の感情が怖くなつたのよ。もしアタシが女だったなら、「ああ、これが片思いつていうもののね」ってほろ苦い青春の思い出として片付けられたんでしょうけど、その頃のアタシはまだ自分がれっきとした男だつて信じ込んでたのよ。何だか自分が得体の知れない世界に踏み込んでしまつたような気がして、すごく怖かった。だから、アタシはだんだんと自分から、竜を遠ざけるようになっていったの。

それから一ヶ月ほど経つた頃かしら。六月頃に二泊三日の林間学校があつたのよね。ほら、例年、親睦を深めるといふ名目のもとに一年生を山奥に隔離して、飯盒炊爨とかキャンプファイヤーとかやらせたりするあれよ。早川さんも憶えてるでしょ？ まあ、その本来は親睦を深めるための林間学校に、アタシと竜は気まずい雰囲気のまま参加することになったのよ。

その林間学校でも、アタシはできるだけ竜との接触を避けるようにしてたわ。グループや部屋もわざと別にしてもらつたり、宿舎で顔を合わせても目を反らして、ろくに挨拶もしなかった。竜はその

たびに、不満そうな、それでいて寂しそうな一瞥を私の横顔に投げかけていたわ。でも、アタシはそんな彼の視線に気づかないふりをしつつけて、林間学校はそのまま二日目を迎えたの。

二日目は午前中から飯盒炊爨だったわ。メニユーはカレーとサラダ。ご飯の担当だったアタシは、飯盒を持って洗い場にお米を洗いに行ったの。そしたらすぐ後で、野菜のボールを持って隣に誰かがやって来た。アタシの顔はこわばったわ。だって、アタシにはそれが誰だかすぐ分かったから……。

「お前、何でこのごろ俺を避けてるんだよ？　俺、何か悪いことした？」

勢いよくジャーっと水道を出して、持ってきたにんじんを洗いながら、低い声で竜が言った。アタシはしばらく言葉が出なかったわ。だっていきなりそんなこと訊かれても、どう説明していいか分からなかったんだもの。アタシはやつとのことで「別に」と答えただけ、それは流れる水の音にかき消されてしまうくらい小さな声だった。そうしたら、竜は持っていたにんじんをボールに叩きつけて、声を荒げたの。

「じゃあ、一体何が気に入らないんだよ！　俺のことばかりシカトしやがって！　そんなに怒らせるようなことしたのかって、気になるじゃないかって！」

アタシその時よほど、自分の気持ちを打ち明けてしまおうかと思ったわ。でも、そんなの無理に決まってる。アタシの頭の中はパニックになった。危うく水を出しっぱなしにしているのも忘れて、お米を流してしまいそうになったほどよ。そしてつい、居たたまれなくなっ

「もう放つといってくれっ！　俺は一人になりたいだけなのに、そういうおせっかいなところが嫌なんだよっ！」

って、心にもない言葉を彼にぶつけちゃったの。

竜はすごく傷ついた顔をしてたわ。いつもは一言二言冗談を飛ばして、深刻な場も茶化してしまうくせに、その日はそれもなくて、

「悪かったな。勝手にしろよ」とだけ言うと、ぷいとそっぽを向いて、洗い場を離れていってしまったの。

アタシ、どれだけすぐ追いかけていって、「今のは嘘だよ」って撤回したかったかشれない。でも結局、そばにいたって、ますます好きになつて辛いだけだし、竜にとつても迷惑になるんだから、これでいいんだって自分に言い聞かせて、その衝動をぐつと我慢したの。

でも、その後に、アタシの決心を揺るがすような、ある出来事が起こつたの。

それは、夕食が終わつてフリータイムを経た十時頃に、就寝前の点呼を取つた時のことだった。宿舎にはフロアごとに談話スペースがあつて、そこに集まつて点呼を取るんだけど、竜のグループだけその場に姿を現さなかつたのよ。

早川さんは知つてると思うけど、私達が泊まつた宿舎つて、部屋つていつても完全な個室じゃなく、二段ベッドが二つずつ壁で仕切られてるだけで、談話スペースからは全体が見渡せるようになってたじゃない？ だから、その階のどこにも彼らがいないってことは一目瞭然だった。

「さては、他の階で油売つてんな」

先生は私達が泊まつている二階以外の、一階と三階を見に行ったわ。でも、しばらくすると一人で帰つてきて、難しそうな顔をして首を振つた。

「いないな。誰か、あいつらがどこに行ったか知つてゐる奴はいないか？」

すると、うちのクラスのあまり喋らない男の子が、おずおずと手を挙げて言つたの。

「あの……、橋爪君たちなら……、外へ出ていきました……何でも肝試しがしたいからとか言つて……」

「何だつて！ この天気でか？」

先生は驚いたように目を見開いて、窓の外を指差した。先生がそ

う言つのも無理はなかったわ。お天気は一時間ほど前から急激に崩れ始めて、つぶてのような激しい雨に、雷鳴まで轟いていたんだもの。こんな時に外に出るなんて、常識では考えられない話だった。「でも、彼らが外に出た時には……、まだ雨は降ってなかったんです……」

その子が弱々しい声で答えると、先生は険しい顔でさらに尋ねた。「それで、何時頃に出て行つたんだ？」

「確か……、八時頃だったと思います」

八時っていつたら、もうかれこれ二時間近くも前よ。いくら何でも肝試しをしに行っただけにしては、帰ってくるのが遅すぎる。アタシの頭の中に、嫌な憶測がよぎったわ。もしかして、何かの事故にあつたり、道に迷つたりしてるんじゃない……。まだ山の中にいるのなら、この天気だし、土砂崩れや落雷も心配だった。先生もきつと同じことを考えたんでしょね、「全く、世話をかけやがって」と言つて溜息をつくと、竜達を捜しに雷雨の中を外へ出ていったの。

先生が去った後のフロアは、何となく重苦しい雰囲気が漂っていた。みんな口では「大丈夫だって」と言いながらも、頭の片隅に「もしかして、もしかしたら……」っていう思いがあつたんでしょね、他のフロアの生徒達みたいにわあわあ騒ぐ気にもなれなくて、辺りはシンと静まり返ってた。

アタシは一人、窓際の柱にもたれて、ずっと外を窺ってたわ。頭の中は不安と後悔でいっぱいだった。まだ何かあるって決まつたわけじゃないのに、悪い方向にばかり想像が膨らんじゃって。ああ、どうして飯盒炊爨の時に、自分は竜にあんなひどいことを言ってしまったんだろう。もし竜に何かあつて、これで彼との関係が終わりを迎えてしまったとしたら、自分は一生後悔するってね。だからアタシ、一生懸命に祈つたわ。どうか早くお天気がよくなりますように、そして竜が無事に帰ってきますように……。

でも、アタシの願いとは裏腹に、お天気はますます悪くなるばかりだった。稲妻の光と音との間はどんどん短くなっていつて、雷が

だんだん近づいてきているのが分かったわ。そしてついに、閃光とバキバキッという何かを引き裂くような音が一緒にしたかと思うと、その瞬間、部屋中の明かりがプツンと同時に消えたの。

キヤーツ、停電よ！ マジー？ 何にも見えねーじゃん！ フロア中は大騒ぎになったわ。そのうちに懐中電灯を持った先生がやってきて、「みんな落ち着きなさい。すぐに電気は復旧すると思うから」ってみんなをなだめた。でも、アタシは停電に右往左往する皆をよそに、全く別のことに気を取られてたの。

……今の雷は絶対に近くに落ちてる。竜は大丈夫だったんだろうか？

アタシは不安でたまらなくなったわ。それまではどこか漠然としていた嫌な予感が、この一瞬で急に現実味を帯びたような気がしたの。アタシの顔は青ざめて、手はガタガタ震えた。アタシはさっきよりいっそう必死で祈ったわ。普段は神様なんか信じないくせに、どうか神様、竜を無事に帰して下さい、どうかアタシから竜を奪わないで下さいって。

そうしたらしばらくして、ボタンとドアが開いたかと思うと、懐中電灯のまぶしい光が現れて、さっき竜を捜しに行った先生の声が聞こえてきたの。

「おい、みんな大丈夫か？」

そう言っただけ懐中電灯で皆を照らす先生の隣には、ずぶ濡れになった竜とその友人達の姿が見えた。

「竜！」

アタシは真っ先に叫んで、彼らのもとに駆け寄っていった。皆も口々に、「よかったなあ！」「心配したんだぞ」って言って集まってきたわ。その時、ちょうど部屋に電気が戻ってきて、辺りがパツと一斉に明るくなった。そしたら、竜がアタシの顔を見てプツと吹き出したの。

「何、お前、泣いてるの？」

そう、アタシったら竜が戻ってきた途端に、安心と嬉しさで思わ

ず涙をこぼしちゃったのよね。アタシは「心配してたんだから、しょうがないじゃないかっ！」って必死で言い訳したけど、彼は「大げさだなあ、溝口は」ってお腹を抱えて大笑いしてたわ。

でも、その後でフツと真顔になると、

「ごめんな」

って言って、アタシの背中を優しくポンと叩いたの。

その時、思ったわ。

ああ、やっぱりアタシは竜がそばにいないとだめだ。この笑顔が見られなくなる辛さを思ったら、この声が聞けなくなる寂しさを思ったら、たとえ報われなくても、自分の思いは胸の奥にしまって、ずっと友達でいることを選ぼうってね。

……で、何だっけ？ あ、そうそう、アタシがどうして竜を好きになったのかって話をしてたのよね。

そうねえ、理由はいろいろあると思うけど、何だかんだ言っても、優しいのよね、竜は。

ほら、アタシ達って純粹であろうとしても、大人になるに従って、つい損得勘定で人と付き合ったりとか、何かしら他人の目を気にして行動しがちじゃない？ でも竜は、そういう計算高さが希薄っていうか、嫌われてる人とも平気で友達になるし、自分が面白いと思ったら大胆なことでも行動に移しちゃうし、普通の人にはない天真爛漫なところがあるのよね。もしかしたら、そんなところに魅力を感じたのかもしれないわ。アタシって、孤高を気取っているようにいて、意外と常識人で気の小さいところがあるから、彼のあの天然の大らかさが羨ましかったんだと思う。

ねえ、だからアタシ、同窓会で竜の現状を聞いた時、すごくかわいそうだとも思ったんだけど、ほんの少し、ほっとしたのも事実なのよ。だって、あの竜が人が変わったみたいに、大企業でのし上がって出世してたり、あるいは公務員にでもなって堅実な人生を送っていたりしたら、きっとアタシ、幻滅してたと思うもの。でも、相変

わらず、竜は竜のままだった。そのことが、嬉しいような悲しいような、複雑な気持ちなのよね……。

セイラはまるで昨日の出来事を語るように、生き生きとした口調で、過去の竜の話の話を私に聞かせてくれた。きつとそれは、竜との思い出が過去の出来事として色褪せるのではなく、永遠に時を刻み続ける万年時計のように、彼女の中で常にしっかりと息づいているからだろう。そして、幾度となく繰り返された巻き戻しと再生で、記憶が再編集されたせいもあるのだろうか、彼女の語る竜の姿は、私の知る竜の姿よりほんの少しかっこよくて、頼りになる男に色づけされているように思われた。

「セイラは、まだ竜のことが好きなんですよ？」

私がセイラの方をチラリと見遣りながら尋ねると、

「そうかもね、竜は私にとって特別な存在だから」

と言って、彼女は口元を綻ばせた。

「って言うてもね、付き合いたいとかそういうんじゃないの。早川さんにも一人ぐらいいるでしょ？ 別に付き合ったことがあるわけじゃないのに、その人と交わした言葉を思い出すだけで幸せで、いつかその人とまた会いたいって、密かに期待に胸を膨らませているような人が。アタシにとって竜はそういう存在なの。時間が経っても記憶が色褪せず、逆に鮮明さを増してくるような、そんな存在なのよ」

「それで、わざわざ関西に行つてまで、竜に会いたいと思つたのね？」

私はいたずらっぽく肩をすくめて言った。

「私ね、ずっと思つてたの。セイラはきつと女になった自分の姿を竜に見てもらいたいんだらうな。竜、きつと驚くよ。だって、セイラこんなにきれいになつてゐるんだもん。私もきれいになつて、いつか洋介を見返してやりたいよ」

しかし、セイラは思いのほか強い口調で、

「それは違うわ」

と言って、きつぱりと私の言葉を否定した。その意外なほど険しい声色に、私は少したじろいだ。冗談なのに、そんなに怒らなくても……、とチラリと隣を窺うと、彼女はハンドルに頼杖について少し逡巡した後、ためらいがちに低い声で呟いた。

「……言ってなかったけど、アタシ、まだ体は女じゃないのよ」

一瞬、静かになった軽自動車の車内を、対向車線のヘッドライトの波が、次々と通り過ぎていった。ヘッドライトに浮かび上がった彼女の表情は、怒っているというよりも、むしろ悲しみを帯びているように見えた。カーステレオから流れてくる、もう何周目かのミスターチルドレンだけが、重苦しい沈黙で満たされた車内にしんみりと響いていた。

## 七

「早川さん、さすがにアタシもそろそろヤバくなってきたわ」

助手席でうつらうつらしていた私は、セイラのその声で目を覚ました。時計を見ると、時刻はもう午前五時に近く、すでに東の空はうつすらと白み始めている。運転席のセイラは、あれからずっと休まずに運転し続けていたらしく、助手席から見える横顔は、この数時間でずいぶんやつれたように見えた。目の下には深い隈が刻まれ、まとめた髪は使い古したほうきのように乱れている。きついミントのガムを噛んでいるにもかかわらず、彼女の目は時折、焦点を失ったように宙を泳いでいた。

「ちよつとだけ、休んでもいいかしら？」

セイラは脇道にハンドルを切ると、近くにあったサービスエリアの駐車場に車を入れた。そこは、滋賀県の湖東のあたりに位置する、多賀サービスエリアというところだった。ここから大阪までは、多めに見積もっても二―三時間といったところなので、時間的にはまだかなりの余裕がある。

セイラは「二時間だけ、二時間だけ寝かせて」と言ってシートを倒すと、後部座席に用意してあった毛布を取って一枚を私に渡し、自分は残った毛布を肩から被って横になった。

「向こうにはお昼までに着けばいいんだから、二時間と言わずにもっと休めばいいのに」

と私は言ったが、すでに彼女は寝入ってしまったらしく、返事の代わりに聞こえてくるのは、すやすやと気持ちの良さそうな寝息ばかりだった。

私は助手席のシートを倒し、自分も毛布を被って眠る態勢を整えた。鼻先には、静かな寝息をたてて眠る、セイラの端正な横顔がある。私よりも長い睫毛、細く尖った鼻頭、そして魅力的な厚ぼったい唇。私にはこんな美貌を持った人が、未だに性別の枠からはぐれ

て、男とも女とも名前のつかない境界をさまよっているのが信じられなかった。

「ねえ、早川さん。こんなこと今さら言うのも何なんだけど、アタシ、怖いのよ。自分が持つて生まれてきた肉体を、自分の意志で作り変えてしまうことが。おかしいわよね。ずっと本当の女になるために、お金も貯めて、着々と準備を進めてきたっていうのに。最後の一步のところで躊躇してしまうなんて」

車の中での告白の後、セイラは自嘲的に笑いながら、私にそう胸の内を打ち明けた。私は何と答えていいか分からず、「そうよね、私も盲腸の手術するっていう時は怖かったもん」と言うと、セイラはブツと吹き出して、そうよねえと呟いた。ずいぶんとピント外れなコメントをしてしまったことは、自分でも分かっていた。

しかしあらためて、もし自分が彼女と同じ立場だったとしたらと考えてみても、やっぱり分からないのだ。私は生まれた時から女として扱われ、それを何の抵抗もなく受け入れてきたから、生まれ持つて与えられた性別を自分自身の手で変えることが、どんなに勇気のいることか。いや、性に関することだけじゃなく、振り返ってみると、あらゆる場面において、私は欲しいものを掴み取るためにがむしやりに努力したりはせず、自分の手に入れられる範囲のものだけで、満足してきた人生だったような気がする。高校までは地域で指定された学校に通い、大学は受験を避けて推薦で女子大に進み、たまたま一社だけ受かったという理由で、前の会社に就職を決めた。最も重視していた結婚でさえ、さんざん出会いを求めてコンパやお見合いパーティーに行った割には、最終的には会社の同僚という一番平凡なパターンに収まった。一体、私は人生においてどれだけ、自分の強い意志で何かを選択してきたというのだろう。でも、それは他の人にだって言えることなんじゃないだろうか。自分で人生の青写真を強く思い描いて、それを実現する人なんてほんの一握り。だいたい人は自分に与えられた運命みたいなものに特に不満も感じず、ただ何となく受け入れ、人生を終えていくんだと思う。でも

セイラは、その最も初歩的なところで、自分の運命に違和感を感じてしまったのだ。例えば名前とか、服装とか、トイレとか恋愛とか、他の人が当たり前なこととして受け入れているものに、いちいち違和感を感じなければいけないというのが、一体どのくらい苦痛を従うことなのか、私なんかには決して計り知ることはできない。そんな私が安易な想像で彼女の苦しみを分かったふりをして、訳知り顔でものを言うのは、何だか申し訳ない気がしたのだ。

だからああいうコメントになってしまったわけだけれど、それでももうちょっと他に言いようがあったんじゃないかなどと、悶々と考えているうちに、私の頭にももやがかかったように、強烈な眠気が襲ってきた。私は目をつむり、だんだんと意識を麻痺させ始める。睡魔に身を任せるように、硬いシートに深々と頭をもたせかけた。

車内でセイラと昔の話をしたせいか、眠っている間に久々に高校時代の夢を見た。

夢の中の私は制服姿で竜の部屋にいた。高校の頃に入り浸った、あの懐かしい部屋だ。目の前には、部屋の中央を陣取るように大きなローテーブルがあって、それを挟んで竜と私が座っている。テーブルの向こう側では、ひときわ鮮やかな色のティラノサウルスが、獰猛な眼差しで私達を睨んでいた。

竜は、スケッチブックを膝の上に置いて、頬杖をついたポーズの私をスケッチしていた。ちょうど、竜が美大の受験を決めた頃のことだ。一足先に推薦で女子大に入学を決めた私は、ごきげんで彼のモデルを務めている。

「ねえ、竜、まだなの？ 同じポーズしてるの疲れちゃったよ」「ちよつと我慢して。もうすぐだから」

夢の中では声は聞こえなかったけれど、私には二人が何を話しているかは分かっていた。十一年前、同じ会話をここで交わした記憶がある。確かこの後、私は彼の狂ったデッサンを覗き込み、クスクスと笑うのだ。

「竜、何それ？ それじゃまるで空豆みたいじゃない。私そんなに不細工じゃないわよ」

「何だよ、人が一生懸命描いてるのに、うるせーな。もう今日はやめだ、やめ。おい、メシ食いに行こーぜ」

私達がまだ仲が良かった頃の、微笑ましいシーンだ。でも、私はこの幸せな時間が長く続かないことを知っている。二人を傍観していた私は、そのことを知らせるために、彼らに声をかけようとした。だが、私と彼らは透明な分厚いガラスのようなもので隔てられていて、いくら声を張り上げても、私の言葉は彼らの耳には届かないのだった。

私はガラスの壁を叩いた。

ドンドン、ドンドン！

しかし、二人は私の存在には全く気づかず、自分達の世界で幸せそうにじゃれ合っている。

私は叫んだ。

聞いて、聞いてったら！

しかし私を閉じ込めたガラスの箱はすごいスピードで彼らから遠ざかっていき、やがて周りは漆黒の闇に包まれた。宇宙のようにどこまでも広いかと思うと、押入れの中のようにどこまでも狭いような、計り知れない闇。私はその闇の中を、ジェットコースターが落下するような速度で、ぐんぐんぐん底知れぬ深みへと引き込まれていった――。

ひゅん。

すると、ふいに場面が変わった。季節は春。私はたくさんの若者達がひしめく人だかりを、少し高い目線から俯瞰していた。

集まった若者達は私に血走った視線を注ぎ、そこで、「あ、あった」と喜ぶ声や、「くそー、ない。浪人だ！」と悔しがる声が上がっている。中には、泣きながら友達と抱き合ったり、皆に胴上げされたりしている若者の姿もあった。

どうやらここは大学の合格発表の会場らしかった。

私は知らぬうちに、合格者の番号が貼り出された、掲示板になっていたのだ。

私は掲示板を見つめる学生達の中に、一人の見知った顔を見つけた。それは竜だった。彼は受験生達が次々と喜びの歓声を上げる中、一人沈痛な面持ちで、何度も手元の紙に目を落としながら、掲示板に目を走らせていた。しかし、何度確認しても彼の番号はなく、彼はとうとう諦めたように溜息をつく、掲示板を支えている私の足を、憎しみを込めて思いきり蹴り上げた。

すると、硬い鉄の棒だったはずの私の足が、溶けた飴のようにぐにやりと曲がった。

その瞬間、抜けるように青かった空が、舞台の照明が落ちるように突然暗闇に変わった。辺りを見ると、いつの間にか、あれだけたくさんいた若者達はどこかに消え去り、私の前には竜一人だけが舞台上でスポットライトを浴びた役者のように、ぽつりと取り残されていた。空からは三月だというのに、雪が舞い降りている。

すると、どこからともなくエレクトリカルパレードの軽快なテーマ曲が流れてきて、周りから電飾に彩られたキャラクター達が陽気に踊りながら、竜のところに集まってきた。彼らは落ち込んだ竜を慰めるように、おどけた仕草をしたり、くるくる回ったりしながら愛嬌を振りまき、リズムに合わせて楽しげに舞い踊っていた。大学のキャンパス内に突如として出現した、光と音のめくるめく世界。竜は最初、その光の乱舞の中で子供のようににはしゃいでいたが、やがてキャラクター達の間を縫って私の方に歩み寄ってくると、まるで聖火ランナーが聖火台に点灯するように、掲示板に貼られた合格発表の紙に、ライターで火を点けた。

私の体は炎に焼き尽くされて、やがて火の玉になって空に打ち上がり、パーンと花火のように上空で破裂した。その高いところから私は、竜と並んで花火を見ている高校生の私を眺めていた。すると、竜がふいに地上にいる私を見つめ、耳元でそつと囁いた。

「なあ、今度はデイズニールドに行こう」

ひゅん。

また、場面が変わった。舞台は再び竜の部屋。しかし、今度はさつきとは打って変わって、部屋には重苦しい空気が漂っていた。私達は机を挟んで、冷めきった夫婦のように疲れた顔で向かい合い、こんなやり取りを繰り返している。

「なあ、お願いだ。頼むよ」

手を合わせて頼み込む竜に、私は取りつく島もなく言い放つ。

「嫌よ、ぜつたい嫌！」

これもかつて見覚えがある、現実起こった出来事だった。私はこの続きを見たくはなかった。しかし、目をつむろうが、耳を塞ごうが、そんなことはおかまいなしに、状況は記憶というプロジェクトによって、容赦なく私の脳裏に浮かび上がってくる。

高校生の私は夢の島に並んだ恐竜の中から、一つの人形を取り、竜に向かって投げつけた。人形は彼の耳の横をかすめ、仰向けになった無様な形で床に落ちた。私はさらに罵声を浴びせて、竜を責め続けた。それは彼のプライドも夢も人格もズタズタに引き裂く、ひどい言葉だ。しかし、竜は何か言いたげな目で私を見つめながらも何も言い返そうとはしなかった。その態度に私はさらに苛立ち、今度は彼の大切に使っていたティラノサウルスを取り上げて彼に投げつけた。ティラノサウルスは竜の肩の横を通過し、壁に当たって粉々に砕け散った。

ひゅん。

次の瞬間、私の目の前に現れたのは、これまでに見たことがないほど消沈した竜の面輪だった。彼は膝を抱えてしゃがみ込み、呆然と私を見下ろして、指先で優しくなぞるように、私の体を撫でていた。私の意識は今や、壊れたティラノサウルスに憑依していたのだ。彼の悲しみが、破片の一つひとつに触れる力ない指の感触を通して、私の中に伝わってくる。

あの時、私は後ろ姿しか見ていないはずなのに、夢の中に現れる彼の表情はどうしてこんなにも生々しいのだろう。彼は放心したよ

うに首をうなだれ、虚ろな暗い目で私を見つめていた。教室の明るいムードメーカーからは想像もつかない、内に籠った彼の姿。今の彼は洋介に捨てられたばかりの私のように、それまで自分を装っていたメツキを剥がされ、内気で気弱な素顔を晒していた。

ああ、私はこれほどまでに、あの時、竜を傷つけていたのだ――。私は今さらながら、自分が不用意にぶつけてしまった言葉の影響の大きさに、自責の念でいっぱいになった。しかし、泣きたいのに粘土でできた私はいくら胸の中が悲しみでつかえても、涙をこぼすことができない。代わりに頭上から、大粒の滴が私のもとに降ってきた。それは竜の涙だった。竜は込み上げてくる感情を一気に吐き出すように、肩を震わせて、激しく嗚咽を上げていた。この光景を私は知らない。高校生の私は、自分の浴びせた言葉に竜が傷つくのを見ているのが耐えられず、逃げるようにその場を飛び出したのだ。私は再び目をつむった。十年前と同じように、自分が招いた状況から目を反らすように。彼が私のせいで悲しみに暮れるのを、もう見ていたくはなかった。

ひゅん。

目を開けると、私の頭上に顔を覗かせたのは、竜ではなく洋介だった。彼は裸で薄暗いホテルの一室におり、罪悪感の込もった顔つきで、じっと私を見つめている。

すると、洋介の後ろで、甘く絡みつくような、熱っぽい女の声を聞いた。

「洋介、早く。何してるの？」

見ると、奥のベッドの上では、私の見たことのない、髪の長いすらりとした女性が一糸まとわぬ姿で横になり、キャビネットの前で逡巡する洋介を、じれったそうに仰ぎ見ていた。その視線に急きたてられた洋介は、ぐっと決心したように目を上げると、やがて私をするすると滑らせて指から外し、キャビネットの上にカランと放り投げた。

婚約指輪に変身した私は、取り残されたショックに呆然としなが

ら、しかしその場から立ち去ることもできずに、ただ事の成り行きを見つめているしかなかった。洋介は私の方を一瞥もせずベッドに向かうと、寝そべった女の体の上に優しく覆い被さった。そして程なく、二人はベッドの上で激しい絡み合いを始めた。

「ねえ、洋介、ほんとにいいの？ 彼女のこと」

「ああ、いいんだ」

私は行き場のなくなった婚約指輪と同じ、居たたまらない気分でその場に佇んでいた。脳裏には漠とした敗北感が、暗雲のように立ちこめていくのが分かった――。

ひゅん。

と、次の瞬間、今度は私が女と立場が逆転したように、裸でベッドの上に横たわっていた。ただし、私の上に重なっているのは、洋介ではなく竜だった。竜は何か、自分の中で蓄積したやるせなさをぶつけるように、痛々しいほど激しく私に腰を擦りつけていた。そして、私の中で果てると、そっとベッドから離れ、いつの間にかテーブルセットの上に用意されていた粘土を、無心にこね始めた。私起き上がったそばに向かおうとすると、彼は手を突き出して制止し、無言でそのまま寝そべっているよう目で合図した。彼はどうか、私のヌードのオブジェを作っているようだった。しかし、彼を作っている粘土の塊は、どう角度を変えて眺めても、人間の形をしているようには見えなかった。私はベッドで寝そべった姿勢のまま、訝しげに竜に問いかけた。

「ねえ、竜、それは恐竜よ――」

ひゅん。

と、私は自分のしゃくり上げる声で目を覚ました。頬の上を生ぬるい涙が一筋、跡を描いて流れ落ちているのが分かる。

脳裏には、まだ先ほどの夢の断片が、子供の頃観た恐怖映画のよう、まざまざと焼きついていて。ばらばらになったティラノサウルスの破片、壊れてしまった夢の島。それらの断片は後味の悪い罪

悪感を伴って、私の胸を締めつけた。その罪悪感が、夢が見せた幻などではなく、現実的に根拠のある悔悟であることを、私自身は痛いほどよく分かっていた。

十一年間、振り返らないようにしてきた苦い記憶。

自然消滅などと言えたものだ。本当は竜に合わせる顔がなく、自分から彼のことを避けるようになったくせに。

最後に竜の家に行った日、私達のムードは最悪だった。竜は美大に落ちたショックから終始無口で、彼の不機嫌な態度に呼応するように、私の苛立ちも募る。そんな一触即発のピリピリした雰囲気、止めをさしたのは竜だった。彼はここ数日、ただでさえ鬱憤のたまっていた私に、さらに追いつちをかけるように、こう切り出してきたのだ。

「なあ、ひかる。一度でいいから、俺にお前のヌードのオブジェを作らせてくれないか？」

竜は床に頭をつけ、必死に私に頼み込んだ。

「なあ、お願いだ。俺、作品たくさん作ってさ、来年こそ海外の美大受けようと思うんだ。だから、協力してくれよ」と。

私が「何もヌードじゃなくても、他のものを作ればいいじゃない」と返すと、竜はなおも食い下がった。

「俺、これを作ったら、何か変われるような気がするんだよ。これからもずっと美術をやり続けていける、自信みたいなのが身につくような気がするんだよ。だから、なあ、お願いだ。嫌なこと頼んでるのは分かってるけど、俺を助けると思っ、頼むよ——」

しかし、私は頑なにそれを拒否した。今から振り返れば、どうしてもそんなに意固地になったりしたのだろう、別に減るもんじゃあるまいしと思うのだけれど、思春期真っ只中で、自尊心の塊だった私は、その言葉が甘えにしか聞こえず、彼の言い訳に自分が利用されているような気がして、どうしても頼みを受け入れることができなかったのだ。

そして私は粉々に打ち砕いた。

彼の大切に使っていたティラノサウルスのフィギュアを。

彼の夢を、プライドを、積み上げてきた価値観を。

「いいかげんに目を醒ましなさいよ、竜！ あんたのそういう現実逃避のお遊戯に付き合わされるのはもうたくさんなの！」と、罵詈雑言を浴びせて。

どうしてもつと優しい言葉で彼を包み込んであげられなかったのだろうか。本当は一番、慰めを必要としていた時だったのに。

今さら後悔しても仕方のないことはよく分かっている。でも、あの同窓会で竜のことを聞いた時、私は思ったのだ。もしあの高三の春、私がもっと彼の気持ちを慮って優しい言葉をかけていれば、違う未来もあり得たんじゃないかと。もちろん、竜の人生なのだから、今彼の置かれた状況の責任は、彼自身にあることは言うまでもないけれど、竜の人生があの日を境に、ころころと坂道を転がるように悪い方向に向かっていったことに、私は少し負い目のようなものを感じてしまうのも事実なのだ。

ふと隣に目を遣ると、私の鼻先には、シートに深く身を沈めて、気持ち良さそうに寝息をたてるセイラの横顔があった。顎にはうっすらと、朝陽に照らされて金色に輝く、産毛のような短い髭が生えている。私はそつと、その柔らかい毛先に覆われた、細く尖った形のいい顎先を撫でた。すると、セイラはくすぐったそうに目を覚まし、赤く腫れあがった私の脛を見て、驚いた顔をして言った。

「どうして、泣いてるの？」

その瞬間、私の喉元に再び熱い感情の波が込み上げてきた。こらえきれなくなった私は、セイラの胸元に嗚咽を上げながらわっと飛び込んだ。

「ねえ、セイラは昨日、どうして私達が別れてしまったのかって訊いたでしょう？ あれはね、私のせいなの。本当は私が悪いのよ。私がひどいことを言って竜を傷つけたから。私があんなこと言わなければ、今ごろは竜だって――」

セイラは支離滅裂なことを口走る私を優しく抱き締め、高ぶった

感情を鎮めるように、そつと頭を何度も撫でてくれた。そして、「大丈夫よ、早川さんのせいじゃない、だからそんなに泣かないで」と、子供をあやすような口調で慰めながら、高校の時と同じように何も詮索することなく、私の話に黙って耳を傾け、どんな子供じみた泣き言でも丸ごと広い心で受け止めてくれたのだった。

私はセイラの腕に抱かれて、自分の気持ちがすうつと潮が引くように鎮まっていくのを感じた。スポンジに水が染みこむように、耳に、体に、心に、じんわりと温かいものが浸透してゆくのが分かる。どうして彼女といると、いつもこうとても肌触りのよいクッションに身を沈めているような、無防備な気持ちになれるのだろうか。それは、彼女がニューハーフで女の気持ちが理解できるからなのか、それとも彼女の言葉や仕草や声のトーンが、私の求めているものとぴったりフィットしているからなのか、理由はよく分からなかった。いずれにせよ、もし彼女が純粋な男なら、意外に波長が合ってうまくやれるのかもしれないのと、私は少し惜しく思うのだった。

そうやって恍惚な気分浸っていると、突然、セイラが「あっ！」と頓狂な声を上げて、シートから身を起こした。

「何？ どうしたの？」

呆氣にとられる私をよそに、彼女は慌しくシートを元に戻すと、急いで車にキーを差し込み、エンジンをかけた。明らかに慌てた様子の彼女に、私は「どうしたの、一体？」と、もう一度尋ねてみた。すると、彼女は時計を指差し、切羽詰まった表情でこう答えたのだった。

「どうしよう、寝坊しちゃった。もう十一時よ」

## 八

神崎さんの会社には、午後三時過ぎに到着した。パンフレットやガイドブックで見かける、たこ焼き屋や通天閣のコテコテしたイメージとは裏腹に、梅田から難波に向かって伸びる御堂筋の周辺には、近代的なオフィスビルが建ち並んでいる。神崎さんが勤めるコンピユータのソフトウェア開発の会社は、その御堂筋を横切るように流れる堂島川沿いに、ひととき高く聳え立つ高層ビルの二十四階にオフィスを構えていた。

オフィスの入口には、受付の代わりに内線用電話が一つ置いてあり、それを使って内部の人間に取り次いでもらう仕組みになっていた。私達はどきどきしながら電話を手に取り、村山 茂之の名前を使つて、神崎さんに用事のある旨を伝えた。すると、中から事務職と思われる女性が顔を出し、

「すいません、神崎は今、外出しております、中の方で少々お待ちいただけますか？」

と言つて、思いがけずすんなりと私達を中へ通してくれた。

私はあまりにうまく事が運ぶことに拍子抜けしてしまった。仕切りで区切られた簡易な来客用スペースに通された時は、万引きで捕まった中学生のように、懇々と説教をされるのかと思わず身構えたが、相手は全く疑う様子など見せず、私達に温かいコーヒーマデを出してくれたのだった。

「うまくいったわね。やつぱり、この格好のおかげかしら」

セイラはニヤリと笑つて、ひそひそ声で私に耳打ちをした。私はあらためて彼女の頭の前から足の先までをじっくりと眺め、「本当にその通りね」と感嘆したように頷いた。

目の前のセイラは、どこから見ても爽やかなビジネスマンそのものといった風貌に様変わりしていた。彼女はサラリーマン時代に着ていたという、地味なグレーのスーツに身を包み、腰まである長い

髪は後ろで束ねてシャツの襟の内側にしまい、ご丁寧にも黒縁の伊達眼鏡までかけて、真面目な好青年を演出していたのだ。それにしても、よく化けたものだ。心なしか声まで、いつものオネエ言葉で話す時より、一オクターブほど低くなっている。

「アタシって、男よりも女にモテるから」

と冗談でセイラは言ったが、実際、彼の端正な容姿は、しばしば私達のそばを通りかかる女子社員達の目を引いていた。

すると、しばらくして私達のいる来客用スペースに、社員IDを首から下げた、スーツ姿の若いサラリーマンが現れた。彼は私達を見ると、見覚えのない顔に不思議そうに首を傾げ、くると踵を返して立ち去ろうとしたので、私達は慌てて彼を呼び止めた。

「神崎さん、待ってください！ 先日、橋爪 竜の件でお電話した早川という者です！」

それを聞くと、その若いサラリーマンはぴたりと足を止め、苦虫を噛み潰したような顔でこちらを振り返った。

「な、何しに来たんですか？ こんなところまで」

「まあまあ、立ち話もなんですから、ゆっくり座って話しましょうよ」

私達はそう言って嫌がる彼を半ば強引に席に着かせると、自分達がどうしてはるばる東京から神崎さんを訪ねるに至ったかを、順を追って丁寧に説明していった。まず、私とセイラは真正正銘、高校時代の竜の同級生で、彼がお金を借りている怪しい金融機関などとは、一切関係のない人間であること。なおかつ私と竜は高校三年生の一時期、付き合っていた間柄で、私達が彼を捜しているのは、同窓会で十一年ぶりに掘り起こしたタイムカプセルを、その日以来なかった彼に渡してあげるためであること……云々。何せ、ここに来るまでに強引な方法を取っているため、相手もかなりの不信任を抱いており、私達は必死に自分達の目的に後る暗いところがないことをアピールし続けなければならなかった。本当はこんなことはしたくなかったんですけど、竜の居所も連絡先も分からないし、手がかり

は神崎さんしかなくて……と、最後には泣き落としに近い手段まで使って、彼の同情を引こうとした。

すると、その思いが通じたのか、最初は警戒心を剥き出しにしていた神崎さんも、話が進むにつれだんだんと表情を和らげ、私達の話に理解を示し始めるようになった。特に、私が竜と付き合っていた頃のツーショット写真を見せると効果はてきめんで、神崎さんは頭の中で勝手に想像を膨らませて、私と竜の間にメロドラマのようなストーリーを作り上げてしまったようだった。

「なるほどね、事情は分かりました。でも早川さん、タイムカプセル渡すとか何とか言って、ほんまは橋爪にまだ未練があるんとちゃいますか？」

「はい？」

「隠さなくつてもええやないですか。いやあ、ええ話やなあ。十一年経つても同じ男を想い続けるなんて、一途すよねえ」

どうやら神崎さんは、私が十一年経つても竜を忘れられず、タイムカプセルにかこつけて彼と再会し、復縁したいと願っていると、そう勘違いしてしまったようなのだ。

そうになると、面白くないのはセイラである。彼女は私の隣で懸命にポーカーフエイスを装っていたが、落ちつきなく膝を叩く指の仕草から、内心かなり苛立っていることが分かった。しかし、「あー、違いますけど……」と、私が誤解を解こうとすると、彼女は目でそれを制した。

駄目よ、早川さん。このまま同情を引いて、連絡先を聞き出すのよ――。

セイラの強い視線は、無言でそう訴えかけていた。私は思わず、開きかけた口を元に戻し、「そうなんです。それでもし、竜の居所を知っていたら、教えていただけないかと思って」と、うるんだ目で神崎さんの顔を覗き込んだ。すると、その狙いが的中したかのように、神崎さんは何やらメモに走り書きを始めた。

「たぶん橋爪なら、ここにいますと思います。俺の知り合いの家なん

やけど。あいつは数ヶ月前から、ここに居候させてもらってるみたいですよ。俺があいつと知り合ったのも、この知り合いを通じてやから、間違いないと思います」

神崎さんが渡してくれたメモには、西区の住所とマンション名が書いてあった。ここなら同じ大阪市内だから、車で行けばそんなに遠くはなさそうだ。

「ありがとうございます。助かります！」

私達は予想以上の収穫に、飛びあがらんばかりに喜んで声を弾ませた。しかし、有頂天の私達とは裏腹に、神崎さんはどこかきまり悪そうな、曖昧な笑みをその顔に浮かべていた。そして、彼は同情するような一瞥を私に送って、ポンと肩を叩くと、こんな言葉を残してその場を立ち去っていったのだった。

「お氣をつけて。でも早川さん、竜に会っても、氣を落としたらあかんよ」

私達がメモで渡された場所に着いたのは、結局夕方頃になった。

どうせ近くだからすぐ行けるだろうと高を括って、ビジネスホテルに宿を取ってから目的地に向かったのだが、周辺に意外と一歩通行が多く、思わぬ迂回を余儀なくされたため、予定より到着が遅れてしまったのだ。神崎さんによると、同居人は昼間は働きに出ているそうなので、訪ねるなら竜が一人にいるその時間帯にと思っていたのだが、すでに空は茜色に染まり、通りには家路を急ぐサラリーマンの姿が目立ち始めている。

竜が居候しているマンションは、川を越えて御堂筋を真っ直ぐ進み、長堀通りを右に折れてしばらく行った堀江という場所にあった。位置的には心斎橋の隣に当たるが、街の雰囲気は阪神高速を隔ててがらりと変わる。古着屋や居酒屋が密集し、ピアスを何十個も開けた個性的なファッションの若者や、路地裏に立つ目的不明の黒人の姿を多く見かける、どこかごみごみした心斎橋とは違い、オフィスビルやマンションの中に、ぼつりぼつりとおしゃれカフェやセレクト

トショップが点在する堀江は、閑静でまるで代官山のような雰囲気だ。その中でも、他の建物とは一線を画すように、すつくと聳え立つ、一棟の立派な高層マンションがあった。地上二十階はありそうな、真新しい瀟洒な建物。それが、神崎さんから教えられた、竜が住んでいるというマンションだった。

「本当にここなのかしら？」

私とセイラはその高いマンションを見上げながら、思わず首を傾げた。というのも、ガラス張りになった吹き抜けのエントランスといい、その奥に見える高級ホテルのような大理石敷きのロビーといい、あまりにも豪華で、とても借金で首が回らない人間が住むようなマンションとは思えなかったからだ。

私達は疑問に思いながらも、ぴかぴかに磨かれた大理石の階段を上がり、物々しい大きなガラスの扉を開けて、エントランスの中に入った。まずは右手に並んだ郵便受けで、住人の名前を確認する。

すると確かに、教えられた号数の郵便受けに、神崎さんの知り合いの「真鍋」という人の名字が記されていた。間違いない。どういういきさつかは知らないが、やはり竜は今、この普通のサラリーマンなどではとても手が出ないような豪華なマンションに、上手いことして転がり込んでいるのだ。

「緊張するわね」

インターホンを前にして、セイラは高鳴る鼓動を鎮めるように、胸に手を当てて大きく息を吸った。チエックインしたホテルで着替えを済ませた彼女は、すっかり格好も声色も元に戻り、この日のために持参した、いっちょうらの純白のワンピースに身を包んでいる。大胆に胸元にドレープの入った、シルクの白いワンピースを着た彼女は、まるで「七年目の浮気」のマリリン・モンローのようだった。意を決して、教えられた号数のチャイムを鳴らしてみると、ピンポンという短い機械音が、静かなエントランスに響き渡った。しかし、インターホンの向こうからは何の反応も返ってこない。さらに二度、三度とチャイムを鳴らしてみても、スピーカーからは竜の声

どころか、部屋の物音一つ洩れてはこなかった。

「留守みたいね」

私達は仕方なく、エントランスを出て、マンションの前で竜の帰りを待つことにした。セイラは白いワンピースが汚れることも気にせず、大理石の階段に疲れたように腰をついた。その仕草には珍しく落ち着きがなく、彼女は手を擦り合わせたり、スカートを触ったりしてそわそわしながら、脇に見えるパーキングの入口を、どんな些細な出入りも見逃さないように凝視している。

「ねえ、竜はアタシを見てどう思うかしら？ もし笑われたり、拒絶されたりしたら、アタシもう立ち直れないかも」

再会の瞬間が現実味を帯びてくるにつれ、急にあらゆる心配が次々と頭をよぎったのか、セイラは待っている間中ずっと、「ああだつたらどうしよう、こうだつたらどうしよう」と、とりとめのない不安を口にしつつづけていた。彼女の不安は蜘蛛の巣のようにあらゆる方向に広がってゆき、隣で聞いている私までもが、それに取り込まれて心もとない気分になるほどだった。

私はふと、先ほど神崎さんが洩らした「早川さん、竜に会っても、気を落としたらあかんよ」というセリフを思い出していた。そういえば、さっきは聞き流してしまったけれど、あれはどういうことなのだろう。私は今まで勝手にその言葉を、昔とは打って変わって、貧乏でうだつが上がらなくなった彼氏に対して、「失望しないでね」という意味だろうと捉えていたのだが、どこい来てみると、彼が住んでいたのは、思いもよらない高級マンションである。一体、借金まみれの彼が何をどうしたらこんなセレブなマンションに住めるのか、私の頭の中にはクエスチョンマークがたくさん転がっていた。ただ漠然とだが、竜が学生時代とはどこか変わってしまったのだろうということには察しがついた。「気を落としてはいけない」というのは、きっとその変化に対して、失望してはいけないということなのだ。一体、彼はどんな風にな変わってしまったのだろうか。緊張と不安と、ちょっぴり野次馬的な期待で、私の胸は高鳴った。

それから一時間ほど待っただろうか。もう日も沈んで辺りが薄暗くなった頃になって、突然、駐車場の入口を注視していた私達の視界に、一台の白いBMWが颯爽と飛び込んできた。その瞬間、私達の目はハンドルを握る運転席の人間に釘づけになった。それは、昔よりは若干ふくよかになり、髪を赤茶けた錆のような色に染めてはいるが、間違いなく竜その人だったからだ。さらに、助手席には見知らぬ若い女性の姿があった。

「竜！」

私達は急いで階段を下り、駐車場に停まったBMWのもとに駆け寄っていった。車を降りた竜は最初、近づいてくる私達が誰だか分からなかったらしく、目を細めて訝しそうにこちらを見つめていたが、それが私だと気づいたとたん、目を丸くして「嘘、ひかる？」と上ずった声を上げた。

「竜、久しぶり！」

「よお、久しぶり。どうしたの、お前？ ……旅行か何か？」

竜は、わざわざ神崎さんの会社まで出向いて居所を聞き出した私達の苦勞も知らないで、拍子抜けするほど呑気な口調で言った。全く、そういう無頓着なところは昔からちつとも変わっちゃいない。思わず「心配して損した」と悪態をつきそうになった。

それにしても、近くで見るとますます、竜の外見は学生時代とは違って見えた。まず、昔はどちらかというややせ型だった体軀には若干の貫禄がついて、顔などはとても借金取りに追われている人間とは思えないほど、血色よくふくよかに肉づいている。さらに、赤錆色の髪をヘアバンドで後ろに流し、大きく胸の開いたサテンのシャツとストライプのスーツに身を包んだ彼は、まるで安物のホストのようだった。

「竜、誰なの？ この人達」

と、その時、感動の再会に水を差すような、若い女性の声が耳に飛び込んできた。それは、車から降りてきた助手席の女性が、見知らぬ女と親しげに喋る竜に、牽制のように投げかけた一言だった。

体にぴつたりと沿ったミニスカートのスーツを颯爽と着こなし、黒い髪をばつさりベリーショートにした、やり手のキャリアウーマンといった風貌。なれなれしく竜の肩に手を回しながら喋るところから見ても、二人がどんな関係にあるのかは、何となく察しがついた。

「ああ、こいつは早川ひかるって言って、高校の同級生」

竜は隣の女性に気兼ねをしているのか、私を「元彼女」とは紹介しなかった。そして、「一緒にいるのは、お前の友達？」と言って私の背中に隠れるように立ったセイラに目を遣った途端、彼はハツと表情を変えて言葉を詰まらせた。

「あれ？　もしかして……」

竜に見つめられたセイラは、私の袖をギュツと掴み、真つ赤になつて俯いたまま顔を上げようとはしなかった。竜は自分の直感を確かめるように身を乗り出して、彼女の顔をまじまじと覗き込んだ。そして、おそろおそろ尋ねた。

「もしかして、溝口……？」

セイラは私の後ろで恥ずかしそうに目を伏せたまま、こくりと小さく頷いた。

「マジで？　え、これ俺を驚かすドッキリか何か？」

きつと何かの冗談だと思ったのだろう。竜の最初の反応は、ひどくおちゃらかしたものだ。しかし、じつと私の陰に隠れて黙り込むセイラや、気まずそうに愛想笑いを浮かべる私を見ていると、ようやく彼も状況を飲み込めてきたらしく、へらへらした口元は徐々に困惑げに引きつっていった。

「もしかして、本当にマジなの？」

竜は手を口元にあてがい、しばしの間、絶句した。そして、間違いないく彼であることを確かめるように、居心地が悪そうにじつと斜め下の地面のあたりを凝視する、セイラの頭から足の先までを何度も熟視した。彼は頭の中を整理するように、顎に手をついて考え込むと、だいぶ経ってから、独り言を呟くようにぼつりと言った。

「いや、でも、きれいだよ……な」

## 九

一時間後、私とセイラと竜は、千日前のお好み焼き屋の中にいた。けげばけした電飾がひしめく商店街の二画にひっそりと佇むその店は、さびれた外観ながらも結構な繁盛ぶりで、店内は香ばしいお好み焼きの匂いと、焼けた鉄板やほろ酔い加減の客達が発する、むせかえりそうな熱気で満ちている。

しばらくすると、私達の前の鉄板にも、豚肉やら魚介やらがたくさん盛られた、豪勢なお好み焼きが次々に運ばれてきた。鉄板に乗せられた途端、ジュウウという音をたてて泡立つソースの甘酸っぱい香りは、昨日からろくなものを食べていなかった私達の胃袋を奮立たせた。豪快にがつつく私達を見て、呆れたように竜が呟く。

「あーあ、それじゃ百年の恋も冷めるなあ」

すると負けずに私も、彼の前に置かれた大盛りのライスを見て言い返した。

「何よ、そっちこそ炭水化物に炭水化物なんて邪道だわ」

「こつちではこういう食べ方が普通なんだよ。うどんにかやくご飯合わせるのと変わんねーだろーが」

セイラはそんな私達のお好み焼きに関する不毛なやり取りを微笑ましく眺めていたが、しばらくして話の腰を折るように口を挟んだ。「ところで、あの人は一緒に来なくてよかったの？」

「あの人」とはむろん、駐車場で竜と一緒にいた女性のことである。竜は「うん、いいんだ」と頷くと、小ベラの上に乗せられたお好み焼きをライスと一緒に頬張った。

「あいつ、ああ見えても社長でさ。コンピューター関係の会社をやつてて、いろいろ忙しいんだよ」

「ふうん、社長のヒモとはいいいご身分ね」

セイラの口調は嫌味たつぷりだったが、竜はそれには気づかず、「だろ?」と屈託なく答えると、再び大きく切ったお好み焼きを、

小ベラで器用にすくって口に運んだ。

それから、彼はこちらでの暮らしぶりを私達に話して聞かせてくれた。それは、そこらの安月給のサラリーマンなど足元にも及ばないほど、優雅で贅沢な生活だった。家の間取りは二十畳のリビング兼キッチンに、ベッドルームとお互いのプライベートルームが二つ。それらを、女社長が働きに出ている昼間は、竜の自由に使っているという。彼の仕事は掃除と洗濯と夕食を作ること。余った時間は、リビングのホームシアターで、昼間っから高級ワインを片手に映画を観たり、女社長がコレクションしたLPレコードを鑑賞したり、自室でインターネットやゲームをして過ごしているんだそうだ。

生活費は毎朝、女社長が一万円をテーブルの上に置いていってくれる。もちろん、食費や日用品に毎日一万円も必要なわけがないので、残ったお金は全て竜の小遣いになるのだ。「その金をコツコツ貯めてさ、この間、これ買ったんだ」と自慢気に話す竜の腕には、シルバーでできたクロムハーツのブレスレットが光っていた。

「あいつは殊勝な奴だよ。男なんていくらでも選びたい放題なのに、わざわざ俺みたいに金も仕事もない男を、好んで家に置いてくれるんだからさ」

「でも、それって本当に竜のことを好きなのかしら？ お金にものを言わせて、男を囲ってる自分が好きなだけなんじゃないの？」

私が言うと、竜は「そうかもな」と自虐的に笑った。

「でも、あいつのおかげでこうして飯が食えてるわけだし、俺はありがたいと思ってるよ。俺のこと好きかどうかなんてどうでもいいよ。お互い必要としているのは間違いないんだからさ」

そうやってどこか開き直ったように話す竜を、セイラは複雑な面持ちで見つめていた。すでに再会したばかりの晴れがましさはなく、話が進むにつれ、彼女の表情には徐々に暗い影が差していった。そしてついに、こらえきれなくなった彼女は、机をバンと叩くと、キツと竜を睨みつけ、

「竜、あなた本当にそれでいいと思ってるの？」

と、厳しい口調で迫った。

「え？　いいって……何が？」

「そんな人の禪で相撲を取るような真似をして、そんなことがいつまでも続けられると思ってるの？　今までのことはきちんとリセットして、自分の力で一からやり直すべきよ。お金の問題だったら、アタシも少しなら力になつてあげられるから――」

やめなよセイラ、そのお金は自分の人生を切り開くための大切なお金でしょ、と、私はつい横槍を入れそうになったが、ぐっとこらえた。一方、当の竜はといえば、それを聞いてもありがたがるどころか、「そんなの、いいよ」と言つて、小ベラの先でお好み焼きの残りを突つくと、ふてくされたようにそつぽを向いた。

「今日俺に会いに来たのは、そのためだったのかよ？」

しかし、セイラはそれには答えず、おもむろにバッグから古ぼけた銀のカプセルを取り出すと、それをそつと竜の前に差し出した。

「何だよ、これ？」

竜は机の上に置かれた銀のケースを見て、不思議そうに首を傾げた。どうやら彼は、タイムカプセルのことを全く憶えていないようだった。

「忘れた？　卒業の時にみんなで埋めたタイムカプセルよ」

すると、彼はようやく全てを諒解したように、「ああ、あれか」と言つて、ポンと手を叩いた。

「うわー、懐かしいな。でも俺、何入れたのか全然憶えてねーや」

竜は高揚した面持ちで、ゆつくりとその銀色の球形のカプセルをひねり開けた。すると、中から掌と同じくらいの大きさの、一体の恐竜のフィギュアが出てきた。あの夢の島で飼われていた、彼の大切なコレクションの一つ、三本角の怪力獣トリケラトプスだ。私は胸が少しずきんとした。

「あー、こりやまた、ずいぶん面白いもんが出てきたなあ」

竜はトリケラトプスを見るなり、懐かしそうに顔を綻ばせた。そして、突き出した角のあたりを、愛しそうに何度も撫でた。そうや

って恋人を見るようにフィギュアを愛でる彼の姿は、部屋で無心に夢の島にはたきをかけていた高校の頃を彷彿とさせた。

「そういえば、昔はこんなのたくさん集めてたなあ。今は売っぱらっちゃって、一つも残ってねーけど」

竜はそんなことを言いながら、無邪気にフィギュアをいじっていた頃に思いを馳せている様子だった。昔のことを懐かしそうに振り返るその顔は、少し寂しそうに見えた。セイラはそんな竜に冷たい一瞥をくれると、さっと席を立てて言った。

「私達はこれを届けに來ただけよ。出過ぎたこと言っただんなら悪かったわね」

セイラは何か言いたげな竜を無視して、「先に帰ってるわ」と私に告げると、呼び止める暇もなく一人で店を出ていってしまった。しかし、そんな怒ったそぶりを見せながらも、彼女は去り際に竜と私の分の代金を机に叩きつけていくことは忘れなかった。

雨が降り始めた。

私はビジネスホテルの窓から、眼下に広がるネオンの街を眺めていた。窓に打ちつける大粒の滴は、電飾の光の輪郭を点描のようにぼかし、ネオンが煌く難波の街は、まるで印象派の風景画のようだ。私は手元の時計と窓の外とを見比べながら、湧き上がる不安に爪を噛んだ。

時刻はもう十時を過ぎている。

セイラはまだ帰ってこない。

セイラが店を出た後、残された私と竜は、そのままそこで何事もなかったように飲み続ける気にもならず、飲み会はすぐにお開きになった。それが八時過ぎ。私は当然、ホテルに戻れば先にセイラが帰って待っていると思い込んでいた。

だが、扉を開けても、そこには誰もいなかったのだ。部屋は人が戻った形跡すらなく、トランクや衣服は出ていく時と同じ状態のまま、床やベッドの上に散らかっていた。

私はすぐに、彼女の携帯に電話をかけた。しかし何度かけても、電話はすぐに留守番サービスに切り替わってしまう。おまけにこの雨だ。私は彼女が心配だった。まあ、彼女ほどの大女（男？）を襲う勇気のある変質者はいないにしても、慣れない街だし何か事故があっただんじゃ……。

そう不安に思い、外に捜しに行こうか逡巡していた時、ふいにドアをノックする音が聞こえた。

「はい……。ど、どうしたの？」

ドアを開けると、その向こうに立っていたのは、ずぶ濡れのセイラだった。彼女は顔にかかった濡れた髪の毛の隙間から「ただいま……」と力なく微笑むと、疲れた足取りで部屋の中に入ってきた。

「ちよつと、どうしたのよ。心配したんだからねっ！」

しかし、彼女はそれには答えず、バスルームからタオルを一枚取ってきて、濡れた髪や体をタオルで拭いながら、ぽつりと一言、「竜と会ったの……」と呟いた。

「竜と？」

私は思わず訊き返した。竜とは、あのお好み焼き屋で別れたはずだ。いったい、いつどこで会ったというのだろう。首を傾げる私にセイラは言った。

「あれからちよつとしてから、携帯に電話がかかってきて、公園で話してた」

「……どんな話？」

セイラは「大した話じゃないわ」と言っ言葉葉を濁した。

「ただ、あんな形で別れるのは、わざわざ東京から出てきた私達に悪いと思っみたい。さっきは悪かったって謝ってくれて、それから、お礼につてこれをくれたの」

そう言つと、彼女はバッグの中から、もそもぞと何かを取り出した。見ると、彼女の掌に収まっていたのは、竜のカプセルに入っていたトリケラトプスのフィギュアだった。

「まさか竜から、生涯で二つ目のプレゼントがもらえるとは思わなかったわ」

「えー、でも、それじゃあせつかく届けに行つたのに意味ないじゃん」

むくれる私を見て、セイラは「そうね」と微笑んだ。

「でも、お陰で美術を志してた昔の気持ちを思い出したみたいよ。あの頃は俺も純粋に何かに向かって頑張ってたんだよなあなんて、目を細めながら言ってたもの」

「そう。じゃあここまで足を運んだ私達の努力も、無駄にはならなかったわけね」

私はキャビネットの上に置いてあつたティーパックの封を破ると、急須にお湯を注いで、お茶を二杯入れた。その片方を渡した時、私の手に触れた彼女の指先は、氷水にでも浸けたかのようにひどく冷たかった。

「ねえ、竜はもう一度、美術をやってみるべきだと思わない？ きっと彼の中にはまだ、美術を諦めきれない気持ちが残っていると思うのよ」

セイラは受け取った緑茶を、湯気を吹きながらおいしそうに一口すすると、一呼吸置いて言葉を続けた。

「だからアタシ言つたの。竜、そんなこと言わないで、今からでも美術を頑張ってみればいいじゃない。まだ若いんだから、諦めるには早いわよって。そしたら竜は、『でも、今さらどうやって？』って訊いてきたわ。学校に行く金もないし、もう二十九なのに作品一つ作つたことがないんだぜって。アタシ『何言ってるの馬鹿ね』って言い返したわ。そんなの今から作ればいいじゃない。道具があれば作品なんてすぐに作れるでしょって——」

すると、セイラはふいに言葉を途切らせ、おもむろに窓の外に目を遣つた。外は雨足がさらに強まり、ほとんど豪雨に近いような有様になっている。静まり返つた部屋に雨音だけが響く中、私はセイラの口から次の言葉が出るのを、ときどきしながら待ち受けていた。

「それからアタシね、頼んだの、竜に。アタシのオブジェを作ってみないって。アタシの、今の、ありのままの、ヌードのオブジェを作ってほしいって——」

私は愕然として言葉を失った。今日車の中で、竜のデリカシーのなさをなじっていた彼女が、どうしてそんなことを頼むのか。計りかねた私は彼女におそろおそろ「どうして？」と尋ねた。

すると彼女はベッドの上で膝を抱え、縮こまった姿勢で絞り出すように言った。

「どうしてって、変わりたいからよ。ここに来たのは竜のためだけじゃない。アタシだって、変わりたいかったの」

白熱灯の淡い光だけが灯る薄暗い部屋の中を、一瞬、稲光が通り抜けていった。セイラは立ち上がり、ずぶ濡れのワンピースを脱ぎ捨てると、呆然と立ち尽くす私の脇を通り過ぎて、バスルームへと入っていった。脱いだ形のままで床に放置されたワンピースの上には、トリケラトプスのフィギュアが、新たな島を見つけたように無防備に横たわっていた。

# 十

そして次の朝から竜は、黒い大きなボストンバッグを携えて、私達のホテルの部屋にやって来るようになった。

「考えたんだけどさ、俺、やるよ」

そう言つて、彼がバッグの中から粘土や道具を取り出した時、セイラは感極まつて、思わず「竜……」と口ごもつて涙ぐんだ。それから、セイラがモデルとなり、竜がオブジェを作る、二人の共同作業が始まつた。

ビジネスホテルの小さな一室は、にわかアトリエに変貌した。私達がいつも寝起きをするベッドの上でセイラがポーズをつけ、その前に設置された小さなローテーブルの上で、竜が作品を作るのだ。

私は彼らが作品に取り組んでいる間は、できるだけ外出して部屋を二人きりにするようにした。「氣を使わなくていいのに」とセイラは言ったが、第三者にずっと見られていたら竜だつて集中できないだろうし、私としても緊張感が漂う空間に、手持ちぶさたで居座り続けるのは、何となく場違いのような氣がしたのだ。

私は毎日、ホテルの周りの、難波や心斎橋の界隈を歩き回つた。なんばパークスやマルイ、心斎橋筋商店街やビッグステップで買い物をし、巨大書店で立ち読みをし、有名な好み焼き屋やうどん屋を食べ歩いた。おかげで、初めは道に迷つてばかりで目当ての場所まで辿り着くのに時間がかかつていたのが、最近では周辺の地理にすっかり詳しくなった。さらに、周辺散策だけでは飽き足らなくなつてくると、時には地下鉄に乗つて梅田や天王寺にまで足を伸ばしたりもした。

しかし、そうやって観光氣分で散策に耽る一方で、私は内心、焦りを感じてもいた。セイラも竜も自分を変えるために新しい一歩を踏み出しているのに、自分だけがそこに乗りきれずに、取り残されている氣がした。

私も変わるために何かを始めなきゃ――。

そうやって、心ばかりはやるのだけれど、じゃあ何を、どうやって？ と考え始めると、具体的には何も思いつかないのだった。

試しに転職の本や趣味の本を手にとってみて、いま一つ自分にピンと来るものがない。本には「三十代から輝く女の秘密」とか、

「好きなことを仕事に！ 切り開けあなたの可能性！」と題して特集が生まれ、三十代で成功を手にした女性達の体験談が載せられていた。だが、三十代で留学し外資系企業に転職を果たした元OLや起業して年商数十億を稼ぐ女社長や、趣味が高じて教室を開くまでになったフラメンコ講師などの体験談を読むたび、そのあらゆるものに見向きもせず一つのものに打ちこむ姿勢に、どこか自分とは違う種類の人間だという隔絶感を覚えてしまうのだった。もしかしていい人がいたら一年後には結婚してしまうかもしれないのに、今までは全く別のことを、一から始めるのは正直言って面倒くさい。結局、いつも私はそんな感想を抱いて、何の解決も見出せず、買った本を手にも悶々としたままホテルに戻る羽目になるのだった。

一方、立ち往生している私とは裏腹に、竜の作品の方は順調に完成に向かって進んでいるようだった。驚くことに、十一年前は何にでもすぐ根を上げていた竜が、今は目を見張るほどの集中力を見せているらしい。作業中なんてほとんど喋らず、黙々と作品づくりに没頭しているんだから、とある日、セイラは帰ってきた私に言っ、部屋の隅のローテーブルを指差した。テーブルの上には、濡れたタオルを被せられた作りかけのオブジェが置かれていた。

「これが、例の？」

私がタオルをめくって中を覗こうとすると、セイラは「駄目よ、まだ」と言っ、私の手をピシヤリと叩いた。

「出来上がってからのお楽しみなんだから。それまではアタシだって見ちゃいけないって言われてるのよ」

でも、まさかずっと目をつむってモデルをするわけにもいかないし、セイラが見ないなんて無理じゃないの？ そう訊くと彼女は、

確かに全然見ないわけじゃないわよ。でも、アタシの位置からじゃ後ろ姿しか見えないの。竜ったら、作業が終わるとすぐタオルを被せちゃって、アタシに途中経過を見せてくれようとしらないのよ、と不服そうに頬を膨らませた。

しかし口ではそう言いながらも、彼女の表情はどこか嬉々としていた。さらに、彼女は私が「でも、お互いずつと喋らないんなら、じつとしてるのって退屈じゃない？」と多少皮肉を込めて訊いても全く意に介する様子はなく、「全然」と首を振り、幸せそうにこう答えるのだった。

「アタシ、ほとんど言葉を交わしてないのに、今までで一番、竜のことが分かるような気がするの。不思議よねえ。高校の頃はあんなに長い時間一緒にいて、たくさん言葉を交わしても、竜のことが分からなくて不満だらけだったのに」

私はそれを聞きながら、満たされているのだな、と思った。彼女は初めて偽りのない自分のままで竜と向き合えている時間に、心からの充足を感じているようだった。対照的に、私は彼女の口から二人の時間がいかに実のあるものかを聞かされるにつれ、だんだんと寂しい気持ちが増していった。自分がますます二人から遠のいていくような疎外感に加え、私はセイラを竜と付き合っていた頃の自分と無意識に比べてしまい、彼のことをここまで献身的に思える彼女に多少の嫉妬心さえ感じてしまうのだ。

そしてその寂しさは、時間を追うごとにますます募っていった。気晴らしに私も没頭できることでも見つけようかと、陶芸教室の体験レッスンに参加してみたりもしたが、そこで同じく一人に来て、大きな壺作りに没頭している、おそらく常連であろう三十代くらいの女性の姿を見つけて、何となくやる気が萎えてしまった。しかし、それは今に始まったことではなかった。竜が作業をする間、一人で出かけるようになってからというもの、私は映画館やレストランや美術館やマッサージシヨップに一人で来ている少し年上の女性の姿を見かけるたび、こうはなりたくないと思っていた女性像に自分が

近づいている気がして、ブルーな気持ちになっていたのだ。このままだと、自分が一人でアラスカにでもチベットにでも行けるようになれそうな気がして怖かった。私は寂しさに慣れたくはなかった。寂しさに慣れることで、孤独を正当化するような女にはなりたくはなかった。

そんな矢先、私は道頓堀川の戎橋のところで、一人の男性に声をかけられた。時刻は確か六時頃、そろそろホテルに戻ろうかと難波に引き返し始めた頃だったと思う。「あの、すみません……」ときこちない口ぶりで声をかけてきた彼は、紺のスーツをパリッと着こなし、サラリーマン風の風貌で、年は三十代半ばといった印象だった。

「いやあ、普段はこんなことしないんだけど、きれいな人だったものだからつい……」

彼はいかにもナンパに慣れていないといった様子で、照れたように頭を掻くと、私に一枚の名刺を差し出した。そこには、CMで見たことのある有名な企業の名が書かれていた。

私は久しぶりに胸が高鳴るのを感じた。それは同級生との再会やおいしい料理やショッピングや陶芸では得られなかった気持ちの高ぶりだった。私はその時、洋介と別れてから自分が一番何を求めていたのかを、はっきりと意識した。フラメンコも英会話も陶芸もガーデニングも、どうりでピンとこないはずだ。私が求めていたのは何よりも新しい出会いだったのだから。

私は一緒に食事に行こうという彼の申し出を快くOKした。彼が連れていってくれたのは、雑誌などでも紹介されたことがあるという評判のイタリアンレストランだった。そこは、竜やセイラと行くお店とは雰囲気違って、重厚な内装やかしこまった接客態度からも、かなり高級であることが窺えた。私は間接照明の薄暗い灯りと、落ち着いた店の雰囲気に吞まれるように、ワインをたくさん飲み、したたかに酔ってしまった。食事の後、彼は足元のおぼつかない私を抱えるようにしてタクシーに乗せると、車をそのままホテルに向

かわせた。

ホテルに向かう車内で、私はシートにもたれながら、酔った頭で果たしてこのままこの男の思惑どおり、ホテルについていいものかを考えていた。いくら今まで彼の態度は紳士的とはいえ、私達は今日出会ったばかりで、しかもその出会いというのが橋の上でのナンパなのだ。今までの私なら、連絡先を聞くだけにしておいて、レストランの前で別れているはずだった。でも……、とそこまですべて考えて、私は想像を巡らせた。もしあそこで別れていれば、東京から来ている私は彼に二度と会う機会がないかもしれないし、私が帰ったら、彼は一緒に食事をしただけの相手と会うために、わざわざ東京に出てきたりはしないだろう。お互いに深く知り合えるチャンスは今しかないのだ、と私は腹を決め、男の肩に頭をもたせかけた。見知らぬ土地で酔っ払った私は、いつになく大胆になっていた。しかし、ホテルに入ると、それまで紳士的だった彼の態度が、人が変わったように急変した。彼は私の衣服を剥ぎ取るように脱がすと、乱暴にベッドに押し倒し、両腕を掴んで私の上にのしかかってきた。そして、強い力で私の喉元に手をやり、首を締めるようにして顎を上げさせると、自分の唇で私の唇を塞いだのだった。

「苦しい……」

私は呻くように呟いたが、彼は聞く耳を持たなかった。そして、長いキスを終えると、彼はいったん私から離れ、ベッドの脇に置いていた自分の鞆をこそごとと探り始めた。私がこっそり後ろから中を覗いてみると、そこにはロープや革ベルトなどの怪しい器具がたくさん詰め込まれていた。

「いやっ！」

私は思わず叫び声を上げ、急いで自分の服と鞆を掴むと、引き留めようとする彼の手を振りほどいて、下着姿のまま廊下に飛び出した。そして、服を着ながら階段を駆け下り、逃げるようにホテルを去った。すでに素っ裸になっていた男は、「ちよつと待って！」と部屋の中から必死に呼び止めたが、外に出てまで私を追ってこよ

うとはしなかった。

私は憔悴しきった足取りで、ビジネスホテルへの道を引き返した。先ほどまでほどよく回っていた酔いは、さっきのシヨックと夜風のせいで、もうすっかり冷めきっていた。時計を見ると、時刻はもう十一時を回ろうとしていた。何の連絡も入れていなかったで、セイラはきつと心配しているだろう。でも、口を開くとその場で泣き崩れてしまいそうだったので、電話をかける気にはなれなかった。

どれほど歩いただろうか。いつの間にか、私の前には先ほど男に声をかけられたところと同じ、戎橋の風景が広がっていた。私は欄干にもたれ、道頓堀川に向かって、男からもらった名刺を憎々しげに破り捨てた。ひどく惨めな気分だった。危うく難は逃れたとはいえ、どうして私ばかりがこんなひどい目に遭わなければいけないのだろうか。洋介といいセイラといい竜といい、人を差し置いて成長したり幸せになったりして、私ばかりが貧乏くじを引いている。そう思うと、悔しさが込み上げてきて、私は固い鉄製の欄干を拳で思いきり何度も叩いた。

そもそも、私の悪運の始まりを遡って考えてみると、きっかけは洋介の婚約解消だった。あれがあつてから、私はろくなことがないそう思うと、私は急に自分に起こった悪い出来事の原因の全てが、彼にあるような気がしてきた。しかも、今ごろはのうのうと新しい恋人と幸せに過ごしているのかと思うと、余計に憎しみが込み上げてきた。

私は衝動的に携帯電話を取り出すと、どうしても削除できなかった彼の番号を呼び出し、発信ボタンを押した。すると、三回コールの後で、聞き慣れた低い声が電話口に出た。

「……もしもし？」

「もしもし、洋介？ 私……」

「お、おお、久しぶり。……どうしたの？」

洋介は約二ヶ月ぶりにかかってきた元婚約者からの電話に、警戒心を隠さない怪訝な口調で訊いた。その明らかに迷惑そうな口ぶり

に、私はますます腹立たしさを覚えた。

「ねえ、洋介。今、私どこにいますか？」

洋介はしばらく間を置いて、「さあ？」と戸惑ったように答えた。「大阪に来てるのよ。道頓堀の橋の上にいる。グリコの看板がすぐそこに見えるよ」

「橋の上」と聞いて、洋介は言葉を詰まらせた。おそらくあらぬことを想像したのだろう。私は彼の頭に思い浮かんだであろう言葉を、そのまま口に出してやった。

「ねえ、私、このまま川に飛び込んで死んじゃおうかな。そしたら、いろんなこと悩まずに済んで楽になるし」

「ばっかっ！ よせっ、そんなこと」

慌てふためく彼に、私は「嘘だよーん」と馬鹿にするように言った。洋介はふうつと安堵の溜息をつく、「悪い冗談はよせよ」と、吐き捨てるように呟いた。

「ねえ、今どこにいるの、外？」

「……いや、家だけど」

「へええ。ねえ、もしかして、例の彼女と一緒に？」

「……関係ないだろ、そんなこと」

「いいじゃない、別に今から押しかけようっていうんじゃないんだから。で、どうなの？ 本当のところ」

洋介は私の執拗な追求にうんざりしたように嘆息すると、洪々「ああ」と白状した。その途端、私は自分が言わせたくせに、何だかひどく不愉快な気分になった。この電話の向こうに、私達の仲を引き裂いた張本人がいるのかと思うと、私は涼しい顔で人の男を盗っていたその女の横っ面を引っぱたいてやりたくなった。

「ねえ、洋介。ちょっと代わってよ。私、喋ってみたいなあ、その人と」

すると電話の向こうから、重い沈黙が流れてきた。しばらくして、「いいかげんにしろよ」という、冷たく突き放すような洋介の一言が、その沈黙に電流のように注がれた。それはさっきまでの逃げ腰

の姿勢とは一転して、どこか凄みのある言い方だった。

「こう言っちゃ何だけど、俺はお前の両親にも謝りに行っだし、キヤンセルにかかった諸々の費用も、ちゃんと支払っただろ？ 一体いつまで俺を責めれば気が済むんだよ」

私が答えられず黙っていると、洋介は「じゃあ。もうこういうのはやめてくれよな」と言っで、一方的に電話を切ってしまった。私は無情にも待ち受けに切り替わった画面を呆然と眺めながら、携帯を川に投げ捨ててやりたいような、激しい衝動が自分の中に湧き上がってくるのを感じた。

悔しい……！

でも、その悔しさをぶつける先がどこにもないのだ。それがまた悔しかった。自分は人を犠牲にして幸せになったくせに、寂しい私に優しい言葉の一つくらいかけてくれたっていいじゃないか。と、私は元婚約者の自分を、まるで忌者のように扱った洋介の態度をひどく妬ましく思った。

いっそのこと本当に川に飛び込んでやろうか、とも思ったが、さすがにこんなことで人生を不意にするのは、ばかばかしいと思ってやめた。ふと辺りを見回すと、周りは人をあざ笑うかのように、けばけかしいネオンがこれでもかというくらいに街を彩っていた。目の前に瞬く張りついた笑顔のグリコの看板、川沿いに群生する居酒屋の雑居ビル、遙かに続く光の帯が川面でゆらゆらと揺れている。欄干にもたれる私の前を、たくさんの人が通り過ぎていった。計らずも、今日は土曜の夜だった。道頓堀は次の朝まで飲み明かそうという酔っ払いで、ひととき賑わいを見せている。私は突然、ひどい孤独感を感じて涙ぐんだ。そして、ついにこらえきれなくなってその場にしゃがみ込むと、私は人が通るのも気にせず、携帯電話を握りしめたまま、嗚咽を上げてむせび泣いた。

結局、ホテルに戻ったのは十二時過ぎになった。ドアを開けるやいなや、セイラは「何してたのよ、もう！ 心配してたんだからね

っ！」と、母親のように私を叱責した。だが、私の泣き腫らした瞼に気づくと声を和らげて、「どうしたの？」と心配そうに尋ねてきた。

その途端、私の眼からは再び涙が溢れ出してきて、私は彼女の胸に飛び込むように泣きついた。セイラは一瞬、訳が分からずきょんとしていたが、すぐにその優しい腕で私を包み込むと、「まあ、落ち着いて」と言っ、私をベッドの上に座らせてくれた。

「言いたくなかったら言わなくていいけど、よかったら事情を説明してくれないかしら？」

私はぐずぐずと鼻をすすりながら、セイラに今日起こった出来事の全てを打ち明けた。陶芸教室の帰りに男に声をかけられ、あやうく危ない目に遭いそうになったこと、元婚約者に電話をかけたなら、厄介者のように冷たくあしらわれたこと。ずっと険しい顔で話を聞いていたセイラは、話が終わると、「とにかく、無事でよかったわ」と言っ、ぎゅっと私を抱き締めてくれた。

私は彼女の胸で再び嗚咽を上げて泣いた。そして、泣きながら、私はこの優しさを、自分が一生独占できないことを残念に思った。どんなに優しくされても、彼女はその胸を私のために一生空け続けていてくれることはないのだ。彼女の胸はいつか素敵な男の人の腕に抱かれるためにある。

「あんまり焦らないことよ。アタシだっ、自分が心が女だっ、気付くのに、十数年かかったんだから」

セイラはそう言っ、私に近くのリフレクソロジーショップで買ったというハーブティーを入れてくれた。湯気からふんわりと立ち上るローズマリーの香りは、疲れきった私の心と体を癒すように、鼻腔に優しく染み込んでいった。

「少しずつ、ゆっくり進めばいいじゃない。『速やかならんを欲するなかれ』っ、昔の偉い人も言っ、ることだし」

私は以前、竜の愚痴をこぼした時に彼女に言われたことを思い出し、人を慰める時、何かにつけ格言を持ち出すセイラに、思わず吹

き出してしまった。

「セイラ、それ誰の言葉？」

「……孔子」

セイラは私を励まそうと、いつもお店で踊っているというダンスを、私のために披露してくれた。映画「プリシラ」のように、アバの「Mamma Mia」を口ずさみながら、頭や腰を大げさに振るコミカルな彼女のダンスに、私はお腹を抱えて笑った。そして曲も終盤に近づいた頃、彼女は踊りながらおもむろにこちらに近づいてくると、私の鞆の中からずりりと携帯電話を引き抜き、耳元で囁いた。

「その元婚約者の名前は何ていうの？」

私は彼女のしようとしていることを察して、戸惑った目で彼女を見返した。しかし、セイラはそんな私の迷いを見透かすように、ぴしやりと言った。

「駄目よ、いつまでも未練がましくしてたら」

セイラの諭すような強い眼差しに決意を固めた私は、「里見 洋介」という彼のフルネームを彼女に告げた。すると彼女は携帯を手に再び歌を口ずさみながら踊り始め、何かの祈祷のように携帯を頭上に高く掲げると、私の方を振り返って言った。

「消すわよ、いいわね？」

私は彼女の目を見返し、こくりと強く頷いた。彼女はそれを見て微かに口元に笑みを浮かべると、また歌の続きを口ずさみ始めた。歌はすでにファイナーレに近づいており、彼女はサビのリフレインのところを歌いながら、何かの呪いを込めるように目をつむり、頭上の携帯をわなわなと震わせた。そして、最後のフレーズの代わりに、「食らえ！ 里見 洋介！」とドスのきいた声で叫ぶと、日本刀でぶった斬るかのように、携帯を思いっきり上から振り下ろしたのだった。

返してもらった携帯を見ると、画面には四角い枠に囲まれて、「『里見 洋介』のデータを消去しました」という表示が現れていた。

でも、その画面を見ても、意外とショックを受けていないことに、私は自分でも驚いた。ふと顔を上げると、フルコーラスを全力で歌いながら踊り切ったセイラの顔には、雨に濡れたように汗が流れ落ちていた。

そして、ついにこの日がやって来た。

竜が私達のホテルに通い詰めるようになって約一週間、ずっと秘密のベールに隠されていた彼の創作活動が、とうとう全貌を現すのだ。今、私の目の前には、白い布で覆いがされた完成後のオブジェがある。

昨日の夜、「もう作業も終わりに近づいてきたから、仕上げは家でするよ」と言って、タオルに包まれたオブジェをポストンバッグに入れて持ち帰った竜だったが、おそらくあと少しと言いながらほとんど一睡もせずに作業に没頭していたのだらう、翌朝、私達の部屋に現れた時には、目を赤く充血させていた。だけど、疲れを隠せないやつれた相貌とは裏腹に、晴れ晴れとした表情には、作品に対する静かな自信が窺えた。

「じゃあ、いくぞ」

自分に気合を入れるように声をかけて、竜は白い布を剥ぎ取った。すると、目の前にはくつろいだ姿勢で身を横たえた、雪白の裸像が現れた。その裸像は、片肘で体重を支えながら捻るように上半身を起こし、陰部を隠すように足を組んで、その組んだ膝の上に沿えるように、もう片方の腕を置いていた。長い髪がかかった胸に膨らみはない。しかし、その全身からは性別を超えた涼しげな色気が漂っていた。中でも、真っ直ぐ正面に向けられた彼女の面差しは印象的で、その目はどこか遠くを見ているようでもあり、自分の内面を見つめているようでもあった。そして、口元にはうっすらと穏やかな微笑をたたえていた。

よく見ると、重心のバランスは微妙にずれているし、形にいびつなところはあるし、顔だって決して似ていないわけではないのだ。なのに、目の前にある裸像は間違いないくセイラに見えた。竜のタッチはティラノサウルスを作った頃の、写真をそのまま立体にするよう

な手法とは明らかに変化していて、セイラの中にある生身の何かを、不器用ながらも何とかして表現しようとしているように見えた。さらには、彼女の内面的な不安定ささえ、作品の中で別のものに昇華しようとするように見えた。なぜなら、私の前で穏やかに微笑むオブジェのセイラには、自分自身に対する静かな自信が漲っているように見えたから。

「これが、アタシ？」

セイラはオブジェの流れるような曲線を、指先でなぞりながら言った。

「竜、実物よりよく作りすぎなんじゃないの？」

「そうか？ 何かもつたいぶったわりに、大したもの出来てなくて悪いんだけど」

「そんなことない。じゅうぶんよ、じゅうぶん」

セイラはぶんぶんと首を振り、自分のオブジェをあらためて愛しそうに見つめた。さらには台座を持ち上げ、像を前や後ろや上や下から丹念に眺め直した。それを見ていると、ふと以前、セイラが車の中で、昔、私に対して嫉妬していたと言っていたことを思い出した。私は今になってやっと、彼女の言っていたことが実感として分かった気がした。こうして感慨深げに作品に見入るセイラを見ると、同じ感動を共有できない自分が少し寂しい。作品に情熱を傾ける竜やセイラをそばで見ていると、実際に苦勞して作品を作り上げた二人の間には、決して入り込むことができないのだ。その手が届きそうで届かない感覚が、何だかもどかしかった。

そうして、お互いいろいろな感慨を抱きながら、黙って作品に見入っていると、その沈黙を破るように、出しぬけに竜が口を開いた。

「俺、決めたよ。大阪を出ることにする」

私とセイラはハッと彼の方に顔を向けた。

「あの女社長はどうするの？」

セイラの問いに、竜はきっぱりと答えた。

「もう、あいつには言ってある。お前の言う通り、いつまでもこん

なこと続けてるわけにはいかないからさ。来週にはこっちを出るよ」それから、竜はセイラの両手に抱えられたオブジェを指差して言った。

「それ溝口にやるよ。大して価値は出ねーと思うけど、よかつたらもらってくれよ」

しかし、セイラは首を横に振った。

「もちろん欲しくないわけじゃないのよ。せつかく竜が作ってくれたんだもの、そりゃ私だって持って帰って毎日眺めていたいわよ」

彼女はそう前置きをした上で、オブジェを静かにテーブルに戻すと、含みを込めた笑みを浮かべながら、チラリと竜を見上げて言った。

「でもね、私が持っておくよりも、もっとふさわしい場所があると思うのよ」

頭上に広がる葉叢の間から差しこんでくる陽射しが、地面に点々とモザイクのような光の模様を描いている。風はほとんどなく、肌に当たる陽光の熱さに、額のあたりがうつすらと汗ばむ。もう、季節はいつの間にか初夏だ。

私はほんの一月ほど前にタイムカプセルを掘った、あの母校の校庭の桜の下に、竜とセイラと三人で佇んでいた。足元には以前と同じ、「一九九八年 三年A組卒業記念」と書かれたぼろぼろの木札がある。ただ、タイムカプセルを掘り起こした部分が周りの土と色が違って、うずたかく盛り上がっているところだけが、以前とは違っていた。

「たった一ヶ月しか経っていないのに、なんだか懐かしいわね」

梅雨の谷間の抜けるような青空を見上げながら、セイラが呟いた。校庭では、休日練習に励む野球部やサッカー部の生徒達の、威勢のいい掛け声がこだましている。私達は木札の周りにしゃがみ込むと、土が盛り上がった部分を、再びシャベルで掘り起こし始めた。土をすくい、穴を掘る作業を進めている間、私の脳裏にはこの数週間の間に起こった出来事が、次々と走馬灯のように甦ってきた。セイラの言った通りだ。たった一ヶ月しか経っていないのに、その間にあまりにもたくさんのが起こりすぎて、同窓会でタイムカプセルを開けたことなど、もう遙か遠い記憶のように感じる。

「このくらいでいいんじゃないか」

ちょうどみかん箱が埋められるほどの穴が掘れた頃、竜はおもむろにボストンバッグの中から、ビニール袋に包まれたセイラのオブジェを取り出した。

この場所にオブジェを埋めようと言い出したのはセイラだった。十一年の時を経て、私達を再び引き合わせてくれたタイムカプセル。今度は同じ場所にオブジェを埋めて、また何かに迷った時や、壁に

ぶつかった時に掘り起こすの、そうしたら、いつでも今の気持ちを思い出して、また頑張ろうって気になれるでしょう、と彼女は竜がオブジェを私達に披露したあの後、そう言ったのだ。

そして私達は今、ここにいます。もしかしたら私達が埋めようとしているものは、オブジェでもカプセルでもなく、時間そのものなのかもしれない、と私はふと思った。積み重ねられていく日常の中で更新される記憶に埋没してゆく時間というものを、浦島太郎の玉手箱のように、切り取って保存する。何年後になるかは分からないけれど、次にこの場所に立った時、私は洋介に振られ、セイラや竜と過ごしたあの数日間の出来事を鮮明に思い出すだろう。たとえばその時、私に家庭があり、セイラが女になって、竜が有名なアーティストになっていても、このほろ苦く気恥ずかしい思い出だけは風化せず、私達は癒えた傷跡をなぞるように、この記憶を懐かしさを覚えながら振り返るのだ。

竜はセイラのオブジェを、持参したプラスチックボックスに収めると、慎重にそれを穴の底に置いた。私達は一瞬、お互いの顔を見合わせた後、「じゃあ、始めよう」という竜の合図で、少しずつその上に土をかけていった。作業は拍子抜けするほどあっという間だった。穴をすっかり埋めた後、竜は盛り上がった真新しい土をぽんぽんとシャベルでならしながら、今さらながらというように私達に尋ねた。

「なあ、ところでこれって、何年後に掘り返すわけ？」

「そりゃあ、今度また人生の壁にぶつかった時よ」

「じゃあ、数ヶ月後には掘り返す可能性もあるってこと？」

「やめて縁起でもない」

「どうせなら、二十年後とかに白髪が出始めるころになって、あー私らも若かったなーなんて、懐かしがりながら開きたいよね」

「その頃には、埋めたことさえ忘れてんじゃねーの？」

私達はそんなことを話しながら母校をあとにし、駅へと続く土手道を歩いていった。眼下の川は陽光を受けてきらきらと煌き、涼し

げなせせらぎの音をたてて穏やかに流れている。川岸には草野球にいそしむ少年達や、犬を連れて散歩をする家族連れや、釣り竿を持ったまま昼寝をするおじさんの姿などが点々と見受けられ、あの同窓会の帰りの時とは打って変わって、人の気配で賑やかすぎるほどだった。

「あつ！」

その時、私はふと立ち止まって声を上げた。大阪にいる間、竜にあの時のことを謝ろう謝ろうと思っていたながら、ずっと忘れていたことを、今思い出したのだ。竜とセイラは振り返り、「どうしたの？」と言って、いきなり素っ頓狂な声を上げた私を不思議そうに見つめていた。

「あのさ、竜……ごめんね」

「は？」

竜はきょとんとして私を見返していた。私が「ほら、ティラノサウルスのことか……」と言うと、竜はようやく合点がいったように、「ああ！」とポンと手をついた。だが、「何で今さら？」という疑問は拭えないらしく、表情には戸惑いの色が浮かんだままだった。

「いや、今さらなんだけど、ちゃんと謝ってなかったからと思って……」

私は自分で自分の言ったことの収集がつかなくなって、苦しげに言い訳をした。しかし次の瞬間、竜の口から出た言葉は、私の意表をつくものだった。

「俺の方こそ、ごめんね」

「え？」

「いや、お前昔から胸ないって気にしてたのに、ヌードになってくれなんて言って、悪かったよ」

すかさず、隣からセイラの鋭いビンタが竜の頬に飛んだ。

「ほんつとに、相変わらずデリカシーがないわね、アンタは！」

と顔を真っ赤にして怒鳴るセイラを見て、私は笑った。ほんとにそ

の通りだ。昔から変わらない。この竜の少しピントの外れたところは、相変わらず。でも、昔は許せなかったその鈍感なところも、今は微笑ましささえ感じるほど、余裕を持って受け止めることができる。

その時、頭上にかかった陸橋の上を、ゴーツという轟音をたてて、普通電車が慌しく通り過ぎていった。この電車も昔と変わらない。高校の頃、私達はこのくすんだ色の古ぼけた車両に揺られながら、目の前に広がる太く穏やかな河流を何度眺めたことだろう。川はいつも豊かな水をたくわえながら、どこまでも続くように地平線の向こうまで真っ直ぐ遠くに伸びていた。

「何か、世界って一つだよなあ」

唐突に、川を眺めながら竜が洩らした言葉に、私とセイラは「は？」と言って顔を見合わせた。

「何、いきなりグロバルなこと言ってるの？」

と思わず突っ込む私達だったが、竜は悠然と言葉を続けた。

「いや、俺これまでは、いつもここじゃない、どこか別の場所に行ったら、今よりもっとよくなるんじゃないかねーかって、ずっと理想郷みたいなのを追いかけてきたけど、なんか最近、そういうんじゃないんだなって思うようになったんだよ。結局さ、どこに行っても同じなんだよ。大阪だって、外国だって、宇宙行っちゃったってさ。返さなきゃ借金だってなくならないし、仕事だって探さなきゃ見つからない。いきなり別の自分になれるわけじゃなくて、俺は今まで自分がしてきたことを、抱えながら生き続けていくしかないんだよなーって」

伸びをするように空に腕を突き出しながら、決意を新たにする竜を見て、セイラは穏やかに微笑んだ。

「そうよ、楽園はもともとあるもんじゃない。どんな場所だって、自分が頑張ればそこが楽園になるのよ」

「快樂のために努力するんじゃない、努力そのものに快樂を見出すことが幸福への秘訣だ」って、かのアンドレ・ジイド大先生も言

つてるしね、とセイラはまた格言を口にすると、土手沿いに植わった緑葉樹の枝に手を伸ばすように、ピヨンと勢いをつけてジャンプをした。だが、着地をした瞬間、ぬかるみにヒールがはまって、彼女はハネが飛んだワンピースの裾をつまみながら、「もう、誰よ。土手歩こうって言ったの」と、恨めしげに頬を膨らませた。

それから半年が経った。幸い、セイラのオブジェが入ったタイムカプセルは、まだ母校の桜の樹の下にある。

竜はあれからすぐ、借金を踏み倒したまま、海外へととんずらしてしまった。結局、貯まった借金は実家の両親が後で払ったと噂で聞いた。相変わらず何をやってるんだかと思っていたら、先日、私の家にアメリカから一通のエアメールが送られてきた。それは竜からのもので、そこには「最近、やっと仕事を見つけました。一応、ものを作る仕事です」と書かれた手紙と、動物の形をしたバイブリータが一緒に入っていた。そして、手紙の最後には「俺もこっちで金を貯めて、今度こそ美大に入学するつもりです」と雑な字で付け加えられていた。何はともあれ、彼は彼で新しい一歩を踏み出したようだ。

セイラは先日、性転換手術を受けるために、ついにタイへと旅立って行った。空港まで見送りに行くと、彼女は竜にもらったトリケラトプスのフィギュアを大事そうに片手に抱えながら、「絶対、お土産買ってくるからね!」と、大仰に手を振って去っていった。今度、日本の地を踏む時には、同じセイラなのに性別が変わっているのかと思うと、何だか不思議な感じがする。でも、肉体とか性別とかいうのは本当はどうでもいいことなのかもしれない。だって、彼女はこっちにいる時からすでに、私なんかよりずっと女らしかったのだから。

そして私はというと、他の二人ほど変化はなく、相変わらず東京の実家で結婚の予定もなくぶらぶらと過ごしている。

でも最近、近くの陶芸工房で仕事を見つけた。驚くことに、半年前は全く興味の湧かなかった陶芸に、私ははまってしまったのだ。仕事はまだ雑用しか任されていないけれど、空いた時間に土を触って、地道に作品を作り続けている。今は、床の間に置く大きな壺作りに挑戦しているところだ。

今進んでいる道が、果たして自分にとって樂園に続く道なのかどうか、それは分からない。もしかしたらまた半年後には、すっかり飽きてしまって、全く別のことを始めているかもしれない。でも、それでもいいのだと思う。

あの同窓会の日を持ち帰ったタイムカプセルは、部屋の収納スペースの片隅に、いつでも中身が入れられるよう、空のまま置いてある。

（終）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0611g/>

---

追憶ハイウェイ

2010年10月8日11時55分発行